

けいはんな学研都市新たな都市創造に向けて
—新たな都市創造プラン—

平成28年3月

けいはんな学研都市新たな都市創造委員会

目次

はじめに 本書の目的と位置づけ	1
第1章 けいはんな学研都市の現状と30年の成果	2
(1) 経緯と現状	2
(2) 成果及び評価	8
第2章 時代潮流	11
(1) 世界の動きの加速化	11
(2) 科学技術と産業・経済に係る潮流	11
(3) 国土の経営に係る潮流	12
第3章 新たなステージにおける課題	14
第4章 新たな都市創造のビジョン	16
4-1 文化学術研究都市としての役割	16
(1) 世界の未来への貢献	16
(2) 知と文化の創造	16
4-2 具体化を目指す都市の姿	17
(1) 世界の知と産業を牽引する都市	17
(2) 持続的にイノベーションを生み出す都市	18
(3) 科学・生活・文化・自然環境が融合する持続可能都市	18
第5章 ビジョン実現に向けた取組	20
5-1 文化・学術研究の振興	22
(1) 知のフロンティアを開拓する学術研究の振興	22
(2) 科学と結びつけたけいはんなならではの文化の創造	23
5-2 イノベーション推進	24
(1) イノベーション推進の中核となる仕組みの構築	25
(2) 研究拠点や地域産業との連携	26
(3) 世界への展開	26
5-3 都市形成	27
(1) 世界に先駆けスマートな暮らしを育むまちづくり	28
(2) 世界に誇る歴史や文化、自然の息づくまちづくり	28
(3) 都市の多様性を高める土地利用の推進	29
(4) 国内外の対流を促進する都市モビリティの向上	30
5-4 都市運営	31
(1) 新たな都市創造に向けたネットワークハブの構築	
ー 新たな都市創造会議	32
(2) 3つの分野における連携・協働の新たな仕組みの構築	32
(3) 都市運営の基盤となる情報の集約・発信の仕組みの構築	33

参考資料

1	けいはんな学研都市新たな都市創造委員会 総会委員名簿	36
2	けいはんな学研都市新たな都市創造委員会 幹事会名簿	38
3	策定経過	39

はじめに 本書の目的と位置づけ

【けいはんな学研都市の到達点】

国家プロジェクトとしてスタートした関西文化学術研究都市（以下「けいはんな学研都市」という。）は、世界のトップクラスの研究をはじめ、オンリーワン技術を活かした研究開発など様々な分野で顕著な成果を生み出してきており、世界でも有数のサイエンスシティとして成長してきている。

関西文化学術研究都市建設促進法（以下「学研促進法」と呼ぶ。）の施行（昭和 62（1987）年）からサード・ステージを終えようとする現在までの概ね 30 年間（3 つのステージ）にけいはんな学研都市の建設は大きく進むとともに、120 を超える数多くの施設が立地し、学術研究機能や研究開発・産業機能の質・量的な充実が進み、新たな産業創出につながる取組も進められてきた。また、都市内の人口は着実に増加してきており今後も増加が見込まれているとともに、生活環境やサービスの整った質の高い暮らしが実現しつつある。さらに、様々な分野で立地機関や住民など多様な主体により、科学教育や自然保全などの創意に満ちた活動も生み出されてきた。

【「新たな都市創造」の意義】

3 府県に跨り多様な主体が集積してきたけいはんな学研都市は、その集積や多様性を大きな強みととらえ、それぞれの主体がその強みを相互に活用し合うとともに、新たな施設の立地や都市建設を進め、あわせて関連する地域、組織との連携を深め、関西圏域全体の中での文化学術研究都市としての役割を果たしつつ世界に向けても存在感を高める段階に来た。本委員会の名前である「新たな都市創造」とは、この認識のもと、

- ① サード・ステージ・プランで謳われた「高度な都市運営」の視点を発展強化し、集積する多様な主体が集積の強みを相互に活用し合うための持続的な「高度な都市運営」の体制を備えた地域を創造する

という意味と

- ② これまでになかった新たなまちづくりを実現する

と言う 2 つの意味において、「新たな都市を創造していく（新たな都市創造）」と言う考え方を表したものである。

【本書が主眼とすべきこと】

以上の認識を踏まえ、本書は、新たな都市創造のビジョンを見据えた上で、「高度な都市運営」の体制及びけいはんな学研都市の概ね 10 年間の方向を示すものである。

【本書の位置づけ】

本書は、国を始めとする幅広い関係主体の総意のもと、国家戦略として推進するけいはんな学研都市の未来に向けたビジョンとして、また関係主体相互の連携・協働や個々の主体の具体的な行動の指針として共有するものである。

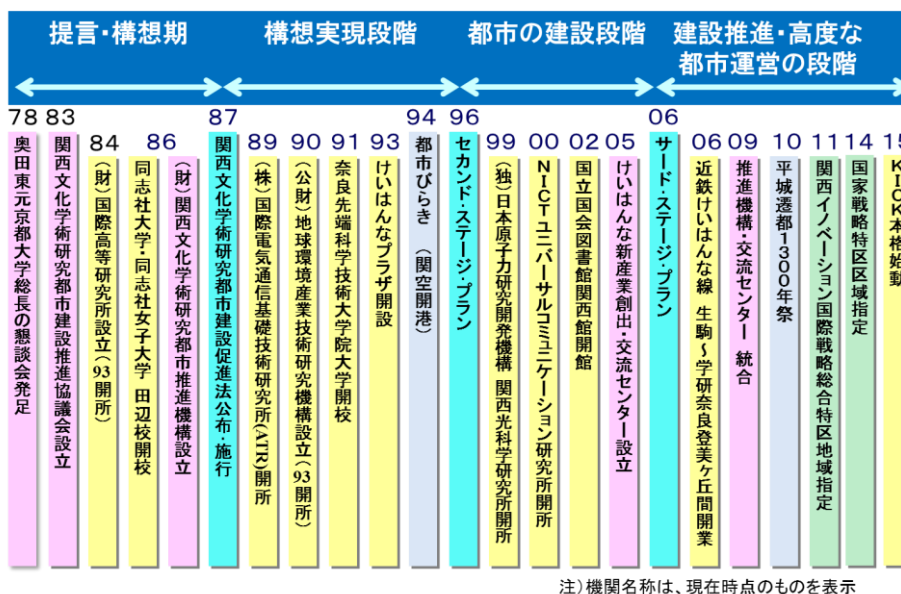
第1章 けいはんな学研都市の現状と30年の成果

(1) 経緯と現状

① 主な経緯

けいはんな学研都市は、昭和53(1978)年に発足した「関西文化学術研究都市調査懇談会」(通称「奥田懇」)を起点とする「提言・構想期」での構想の具体化を経て、昭和62(1987)年に学研促進法が公布・施行され、それ以後、国家プロジェクトとして、構想実現段階、都市の建設段階、都市建設・高度な都市運営の段階の3つのステージを経ながら、進化・発展してきている。

■けいはんな学研都市の経緯



② けいはんな学研都市の3つの特徴

けいはんな学研都市の特徴は次の3つにまとめられる。

第1は、産学官民の協力と連携である。都市建設にあたっては、奥田懇の当初から産学官民連携により構想が進められており、今日に至るまで大学、研究機関、企業、行政、住民等の連携を基調とし、民間活力を最大限に活用しながら、各分野の適切な協力と役割分担の下、都市づくりを進めてきている。

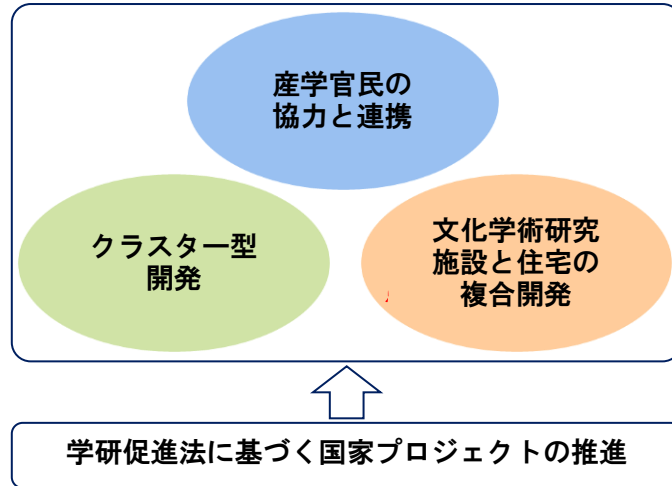
第2はクラスター(文化学術研究地区)型開発である。本都市では、都市の規模、土地利用、骨格的なインフラ等に関する基本的事項をあらかじめ定め12の文化学術研究地区をぶどうの房のように分散配置し、クラスター外の自然環境を保全するとともに、隣接する既成市街地や農林業と調和のとれた開発を進めている。

その上で、個々の内容については、開発の条件が整った地区から社会の変化等にも柔軟に対応しながら計画を定め、順次開発を進めてきている。

第3は、文化学術研究施設と住宅の複合開発である。文化学術研究施設だけでなく住宅地も含めた開発とし、学術と生活、文化の融合した複合的な都市づくりを目指している。住民の生活に

根差した都市としての賑わいや魅力が演出できるとともに、住民参加による実証事業や評価が可能となっている。

■けいはんな学研都市の3つの特徴



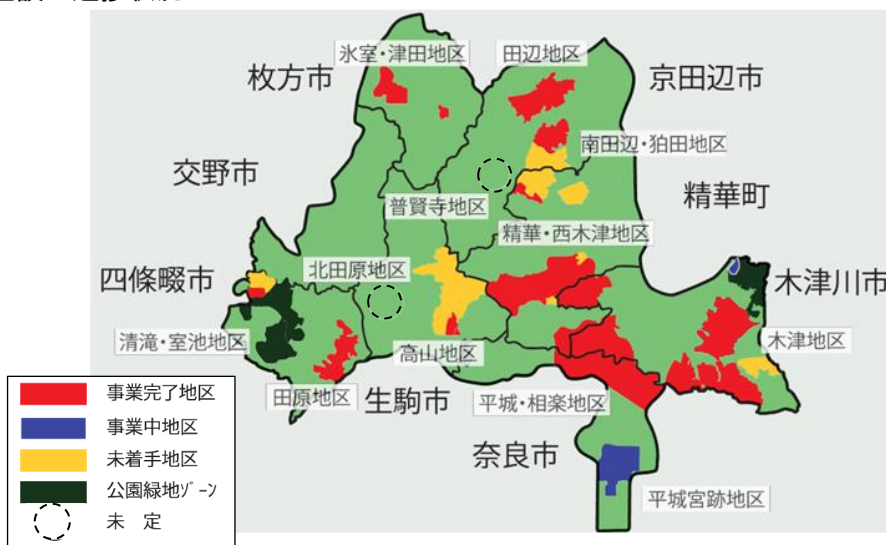
③ 都市の建設

(クラスター型開発の現状)

けいはんな学研都市は、京都府、大阪府、奈良県の3府県、8市町にまたがり、総面積は15,000haで、広大な地域に広がっている。また、各地域に12のクラスターとして配置された文化学術研究地区は3,600haあり、筑波研究学園都市(2,700ha)と並んで、世界的にも最大級の規模を有するサイエンスシティである。

これまで、段階的に都市建設が進められ、文化学術研究地区3,600haの6割にあたる2,144haが整備済となっている。

■都市建設の進捗状況



クラスターは、国の関西文化学術研究都市の建設に関する基本方針と、府県の関西文化学術研究都市の建設に関する計画に定められた文化学術研究ゾーン、センターゾーン、住宅地ゾーン、公園・緑地ゾーン等の配置及び規模に基づき基盤整備が行われるとともに、大学、研究機関、研究開発型産業施設、文化施設、交流施設や、商業・サービス施設及び住宅の整備が進められている。

なお、木津地区等の一部のクラスターで、社会の変化に対応するため当初の計画を大幅に見直している。

その結果、田辺地区、精華・西木津地区、平城・相楽地区、氷室・津田地区、清滝・室池地区、田原地区の6つのクラスターでは概ね整備が終わり、文化学術研究施設と住宅等の共存する良好な市街地が形成されている。

平城宮跡地区では、平城宮跡を中心とする歴史・文化遺産の保全・整備が、木津地区では施設及び住宅の整備等が進められている。

南田辺・狛田地区、高山地区では、一部の区域の整備が完了しているが、未整備な区域も残されている。

また、普賢寺地区及び北田原地区については、区域及び整備方針は未定である。なお、北田原地区については、既に北田原工業団地として数多くの生産施設等の立地が進んでいる。

■12のクラスターの概況

地区	府県	面積 (ha)		現在人口*2 (人)	立地施設数*3
		計画面積	整備済*1		
田辺	京都府	100	100	73	3
南田辺・狛田	京都府	344	83	2,250	4
木津	京都府	737	399	15,015	9
精華・西木津	京都府	506	477	21,470	51
平城・相楽	京都府 奈良県	626	618	41,984	16
氷室・津田	大阪府	74	74	2,418	22
清滝・室池	大阪府	340	247	145	9
田原	大阪府	127	125	6,839	2
平城宮跡	奈良県	142	11	513	5
高山	奈良県	333	40	516	8
普賢寺	京都府	未定	-	-	-
北田原	奈良県	未定	-	-	-
合計		3,600	2,144	91,223	129

*1 平成 27.4.1 現在 国土交通省調べ

*2 平成 27.4.1 現在 住民基本台帳人口

*3 平成 28.1.末現在 (公財)関西文化学術研究都市推進機構資料

(交通基盤の現状)

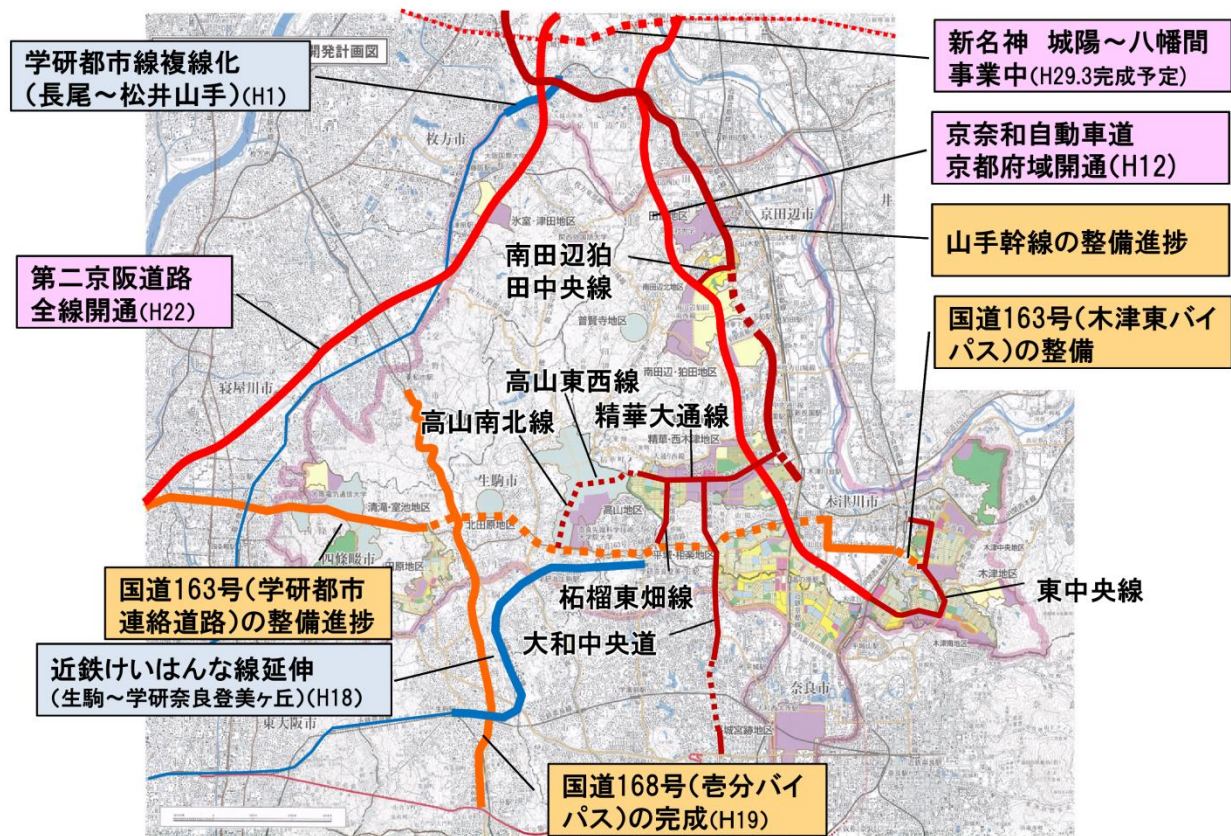
鉄道では、近鉄けいはんな線の生駒～学研奈良登美ヶ丘間が開業（平成 18（2006）年 3 月）し、JR 片町線（学研都市線）は長尾から松井山手までの複線化が図られた。

道路では、京奈和自動車道の京都府域及び第二京阪道路が全線開通し、新名神高速道路の城陽～八幡間も近く開通の予定であり、これらにより学研都市を取り囲む高速道路網が完成することとなる。

また、母都市との連結や学研都市内の連絡に資する幹線道路では、いわゆるけいはんな学研都市の東西軸、「学研都市連絡道路」と呼ばれる国道 163 号の整備が順次進んでおり、南北軸では山手幹線が一部区間を残すのみとなっている。さらに、国道 168 号壺分（いちぶ）バイパスや大和中央道等も整備され、奈良方面との接続も強化された。

一方、未整備な路線・区間もあり、交通アクセス向上に向けて引き続き整備の推進が必要と考えられる。

■都市建設の進捗状況（交通基盤）（平成 28 年 2 月末現在）



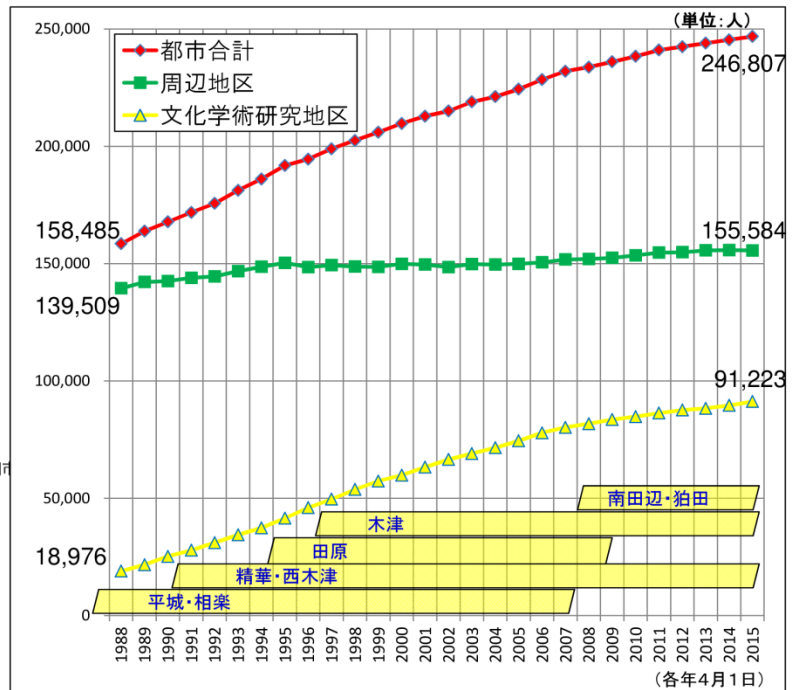
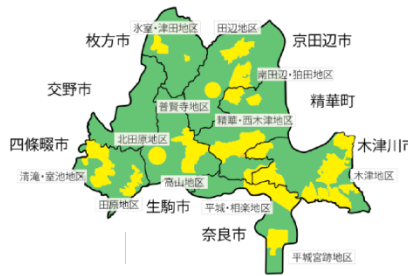
④ 都市の人口

けいはんな学研都市の人口は、増加が続いており、約 24 万 7 千人に達している。

けいはんな学研都市は、面的な開発事業を行う文化学術研究地区、それを取り囲む既成の市街地や集落である周辺地区で構成されているが、いずれも人口増加を続けている。けいはんな学研都市の大きな特徴である、熟度に応じて順次事業を進めるクラスター型開発であること、住む場所と研究所等の用地とをセットで開発する形態であることが功を奏して、すでに人口減少が始まっている関西において人口が増え続ける地域となっている。

■人口の推移

2015年4月1日現在
文化学術研究地区 91,223人
周辺地区 155,584人
都市合計 246,807人

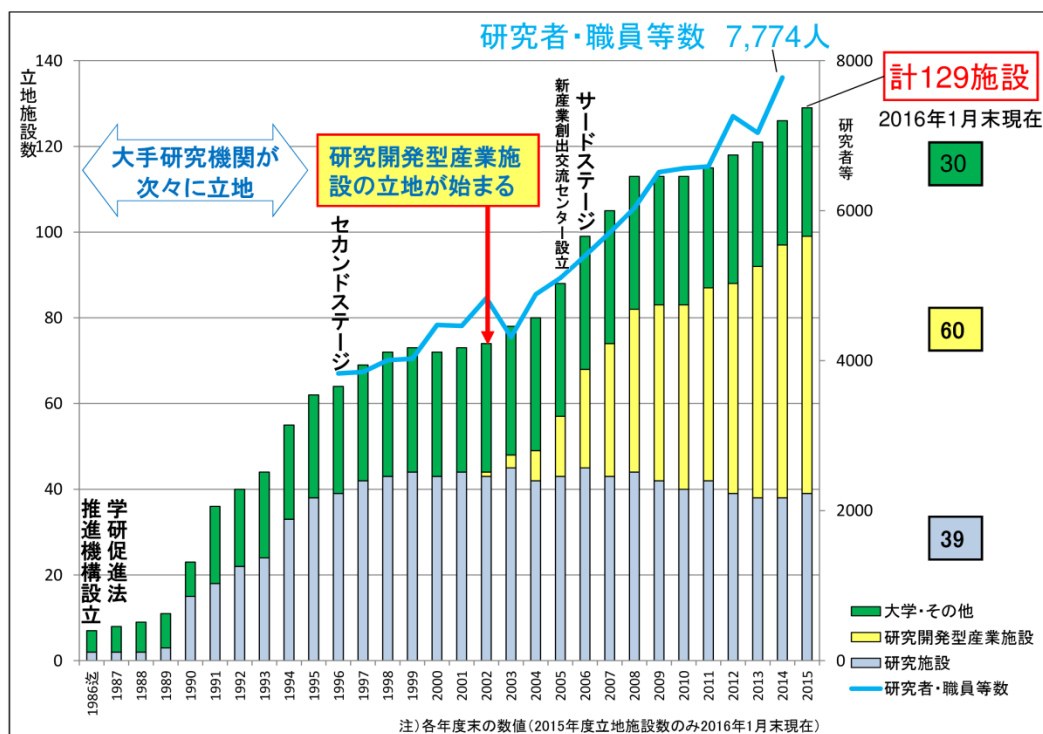


⑤ 立地施設と研究開発の推移

けいはんな学研都市内の立地施設数は 129 施設である（平成 28（2016）年 1 月末現在）。30 の大学施設等（8 大学及び文化学術研究施設等）、39 の研究施設、60 の研究開発型産業施設が立地している。特に、セカンド・ステージ段階における立地規制緩和が功を奏して研究開発型産業施設の立地が拡大しており、施設数は順調に増加している。

また、就業者（研究者）数も増加を続け、平成 27（2015）年 3 月末現在で 7,774 人となっている。

■立地施設数の推移

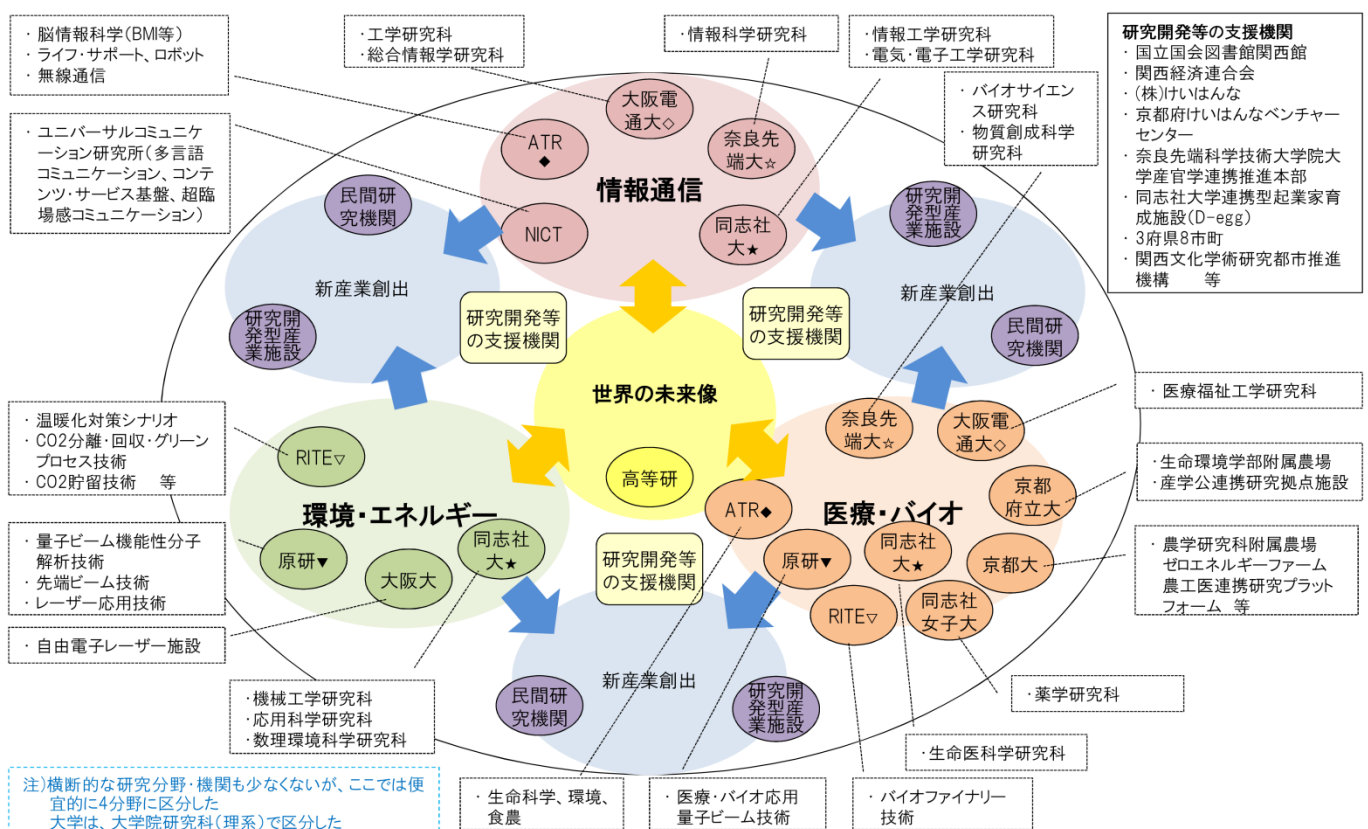


立地機関の研究分野は多様であり、概括すると、情報通信、環境・エネルギー、医療・バイオの3つの分野が柱となっている。それぞれの分野に特化した機関もあれば、横断的な研究分野を有する機関もある。これらの研究機関や研究開発型産業施設が時には連携しながら、研究や生産、新事業の創出が図られている。

また、国立国会図書館関西館などの研究開発等の支援機関も立地している。

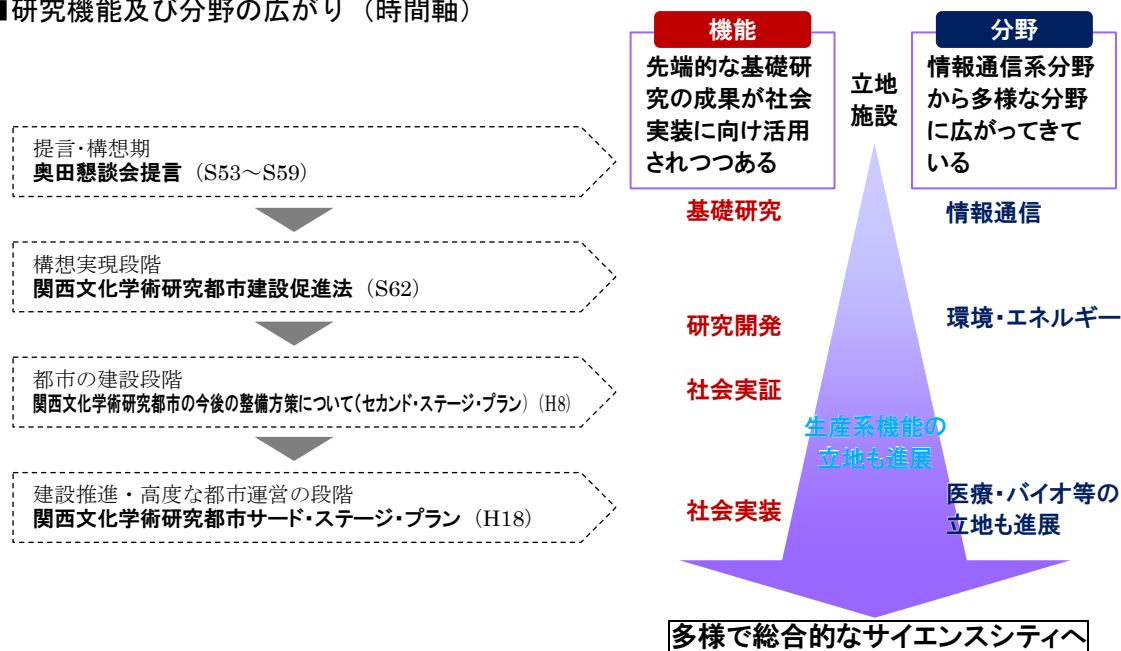
このように、多方面にわたる研究分野で先端的な研究開発が行われ、研究開発や新産業創出に向けた支援機能も集積する、複合的な研究開発拠点であると言える。

■研究分野の広がり



これらを時間軸で見ると、前述した構想・提言段階、構想実現段階、都市の建設段階、建設推進・高度な都市運営の段階の各段階に即して、立地施設・機能も多様性を増してきている。当初は基礎研究段階であったものが、社会実装まで進むものも出てきており、研究分野でも、情報通信系分野から環境・エネルギー、そして医療・バイオなどの幅広い分野に順次広がってきている。さらには、生産機能の立地も進んできている。また、企業の規模も中小のベンチャー企業から大企業まで多様な規模の企業が立地してきている。

■研究機能及び分野の広がり（時間軸）



（２）成果及び評価

サード・ステージ・プランでは、けいはんな学研都市の理念として、「文化学術研究の新たな展開の拠点づくり」、「世界及び我が国の文化学術研究の発展並びに国民経済の発達への寄与」の二つに加えて、新たな理念として「未来を拓く知の創造都市の形成」が位置づけられた。さらに、この理念の実現に向けて特に重視すべき視点として、i)学研都市の総合力の強化、ii)交流連携を通じた一体性の確立、iii)都市運営に重点をおいた取組の三点が上げられた。

これらの三点は、その後のけいはんな学研都市において、常に大きな課題として議論されてきた重要なポイントであったと言える。以下、都市の建設及び上記の三つの視点から、けいはんな学研都市の成果について、近年の具体的な動向を踏まえて評価する。

① クラスタ型開発による都市建設の推進

けいはんな学研都市では、i)12のクラスタ及び骨格的なインフラ等に関する基本的事項をあらかじめ定めた上で、ii)個々のクラスタの開発についてはそれぞれの開発主体が社会のニーズに柔軟に対応しながら段階的に計画を定め都市整備を進めるとともに、iii)国及び3府県8市町が連携し広域的な視点から都市整備や施設立地促進に向けた施策を展開してきている。その結果として、それぞれの時代のニーズに合った都市建設を進めることができ、これまでに文化学術研究地区の計画面積の約6割は整備済となり、人口、立地施設も増え続けている。

けいはんな学研都市のこのようなクラスタ型の開発は、都市の持続可能性を高める先進的な手法であると言える。

このように都市建設は順次進んでいるが、広域及び域内交通アクセスについては、今だ未整備な箇所も一部残っているなど、今後の課題となっている。

さらに、都市景観の面では、良好な景観誘導に対する緑の都市賞の受賞やけいはんなプラザ日時計広場が京都府景観資産に指定されるなど、品格ある都市空間の形成も進んでいる。

② 「学研都市の総合力の強化」の視点

（文化学研究機能の向上）

近年では京都府立大学精華キャンパス（生命環境学部附属農場）や、サントリーワールドリサーチセンターの開設、京都大学大学院農学研究科附属農場の開設予定（平成 28（2016）年度）など、けいはんな学研都市の研究開発等の分野を広げる新たな機関の立地が進むとともに、関西イノベーション国際戦略総合特区の指定を受け、旧私のごと館の施設を再活用したけいはんなオープンイノベーションセンター（略称 KICK）が、平成 27（2015）年度から、産学官民連携によるオープンイノベーションに向けた重要な拠点として本格始動した。

一方、研究面でも、情報通信、環境、ロボット、光量子等の幅広い分野で多くの成果が出されてきた。さらには、国立国会図書館関西館が情報提供機能を大幅に向上するとともに、文化拠点の高度化として、平城宮跡の保存整備等も進められている。

（立地施設の多様性）

生産機能の立地規制の緩和により、数多くの研究開発型産業施設の立地が進んだ。このことにより、けいはんな学研都市は基礎研究及び研究開発からものづくりまで幅広い領域をカバーしてきており、多様な連携によるイノベーション創出の可能性が広がってきている。

また、研究開発型産業施設が扱う分野の多様性がさらに高まってきていることから、単機能・単分野に特化したサイエンスシティではなく、研究・産業・居住機能をバランスよく兼ね備えた、総合力の高い地域になりつつあると言える。

（新産業の創出）

新事業の創出に向け、立地機関等による、情報通信、環境・エネルギー、光医療産業、ロボット、バイオ等の分野における各種国プロジェクト等の推進とともに、産学官民連携による次世代エネルギー・社会システム実証プロジェクト、地域イノベーション戦略支援プログラム（ヘルスケア）など、国のプロジェクトとして実証事業も行い、住民も参画する横断的な取組が行われたことは、大きな成果と言える。

しかし、集積のメリットを活かした新産業の創出の成果や仕組みはまだ十分とは言えず、まさに、今後本格的に生み出していくべき段階にあると言える。

（情報発信の強化によるブランドの確立）

スマートシティ分野の国際シンポジウム、企業・団体展示を内容とした京都スマートシティエキスポを継続的に開催し、また、首都圏では企業立地セミナーを開催するなど積極的に情報発信に取り組んでいるものの、けいはんな学研都市全体としての世界や首都圏等への情報発信力や知名度は、まだ十分とは言えない。

（都市機能の向上）

各クラスターでの商業やサービス施設等の整備が進み、医療機関の立地など、研究者、住民の利便性やサービスは一定の向上を見ている。一方、都市環境の国際化については、同志社国際学院が開校するなど、外国人研究者の家族向けの教育、滞在環境など国際化に向けた環境整備も進んではいるが、いまだ十分とは言えない。

③ 「交流連携を通じた都市の一体性の確立」の視点

（広域的な交流連携）

これまで、関西イノベーション国際戦略総合特区と国家戦略特区の2つの特区が指定されている。前者は、国際競争力の強化のためのイノベーションプラットフォームの構築がテーマとなり、けいはんなではKICKの始動や次世代エネルギー・社会システム実証事業の推進に取り組んできた。しかし、関西の各拠点間の連携推進という点からはまだ十分とは言えない。

また、国際交流では、中国、韓国、台湾のサイエンスシティとの交流なども進められたが、その後やや停滞し、本格的、持続的な活動には至っていない。そのため、アジアの主要なサイエンスパーク等からなるASPA（アジアサイエンスパーク協会）に加盟（平成26（2014）年）し、交流や情報発信を進めている。

（多様な交流機会の創出）

けいはんな学研都市においては、学術の振興、新産業の創出、学術科学の啓発・学習等に向け、研究者、住民、NPO、教育機関、立地機関等が参画する特色ある交流機会が設けられている。

例えば、新産業創出等に向けたイノベーション交流会など研究者相互の交流、科学のまちの子どもたちプロジェクトやけいはんな科学コミュニケーション推進ネットワークなど科学の分野で子どもを中心に据えた交流、さらには、国際高等研究所で行っているゲートの会などの横断的な交流など、学研都市の資源を活かした多様な主体による交流が進められている。

④ 「高度な都市運営に重点をおいた取組」の視点

（「関西全体で学研都市を支え・推進する体制」づくり）

専門的な立場からの政策提言等の機関として学術委員会を平成元（1989）年から平成21（2009）年度まで継続したが、その後の具体的な取組には至っていない。

（「学研都市を一体化した新たな運営組織」づくり）

サード・ステージ・プランでは数多くの立地機関や3府県8市町が連携して都市運営を行うという、筑波研究学園都市とは異なる、あるいは世界でも例のない都市のマネジメントの仕組みが目指されたと言える。具体的には、横断的な運営体制として、けいはんな学研都市活性化促進協議会など、協議会型の運営が進められてきているが、統一的で強力な運営体制の確立には至っていないのが現状と言える。

（学研都市全体の「産学官民連携組織」の構築）

セカンド・ステージにおいてけいはんな新産業創造・交流センターが設立され、平成21（2009）年に関西文化学術研究都市推進機構と統合し、機能の継承を図ったが、けいはんな学研都市全体を俯瞰した統一的で強力な運営体制に至っているとは言えない。

このように、「高度な都市運営」の点からは、サード・ステージの10年においても大きな進展があったとは言えず、今後の大きな課題の一つと考えられる。

第2章 時代潮流

(1) 世界の動きの加速化

世界の情勢は刻々と変化し、またその動きは加速化している。環境など地球規模の問題が深刻さの度合いを増しているとともに、一方では、近年の科学技術の飛躍的な発展が目覚ましく、情報通信技術（ICT）の進化に伴う経済・社会の構造の変化や、生命科学の進化を通じた生命倫理の捉え方の変化など、社会のあり様自体も今後大きく変化していく可能性がある。

(2) 科学技術と産業・経済に係る潮流

① 持続可能社会に向けた課題の深刻化

地球温暖化等の環境問題、資源エネルギー問題、食糧・水問題といった持続可能性に係る問題は引き続き大きくなっており、持続可能性への懸念も示されている。一方、世界の経済的なパワーバランスの変化を背景とした国際社会の不安定化なども生じており、世界の国々が協調、協力して取り組むべき地球規模の課題はますます深刻さを増していると言える。

けいはんな学研都市は、その発足以来、人類の持続可能性を大きなテーマとしており、地球環境、食料、エネルギー、ライフサイエンスなど多くの分野の専門的な研究を行う機関が立地していることから、持続可能社会の実現に向けたけいはんな学研都市の役割は今後ともますます大きくなるものと考えられる。

② 経済のグローバル化と科学技術・イノベーションの飛躍的な発展

経済のグローバル化が大きく進んでおり、多国籍企業は世界経済において大きな比重を占めている。また、特に、中国やアジアなど新興国の経済的台頭が目覚ましく、製造拠点や巨大なマーケットとして着実に成長しており、世界経済の構造変化が進みつつある。

こうした変化の背景の一つには科学技術の大きな進歩がある。コンピュータとICTの飛躍的な進化を基盤として、脳科学、人工知能、再生医療、バイオ、環境、エネルギー、ナノテク、宇宙開発など、あらゆる分野で科学技術が目覚ましく進歩してきている。

これらにより、社会の大きな変化をもたらす新たなビジネスモデルが続々と生み出されており、さらに、インターネットを媒介としてあらゆる情報とモノがつながるIoT、IoEの進展により、人間生活や社会の様々な情報が共有され、様々なニーズによりきめ細かく効率的に対応できる新たな産業・社会の到来が予測されている。ものづくりの分野でも、例えばドイツにおけるIoTの生産過程等への活用を通じた「インダストリー4.0」の取組など、科学技術の進歩は、社会をこれまでよりもさらに早いスピードで変えていく大きな動因になるものと考えられる。

情報通信分野の研究機関が多数立地するけいはんな学研都市では、こうした分野への研究開発面での寄与が期待される。

③ イノベーション推進に向けた我が国の取組

我が国の経済を見ると、GDPの国際比率は低下し、ハイテク産業の貿易収支も低下するなど、かつての強みは力を弱め、国際競争力を低下させてきている。そのためイノベーションによる新

産業創出を強力かつスピーディに進めていくことが、国際社会への貢献と国際的な競争力の向上の上で不可欠である。

この課題に対応するため国は、第4期科学技術基本計画（平成23（2011）年）などにおいて、科学技術イノベーションが、我が国経済の失速を回避し、我が国産業にとって有望な市場の開拓を主導する経済成長のエンジンとなり、世界への貢献や、我が国が直面する課題を乗り越える切札として位置づけた。また、科学技術イノベーションの成果を、目指す経済社会の実現につなげていく出口指向型の政策運営の必要性が示され、重点的な戦略課題として掲げられた震災復興・再生、グリーンイノベーション、ライフイノベーション等の推進に資源を集中する大型プロジェクト（SIP、ImPACT等）が立ち上げられ、強力に推進されている。

けいはんな学研都市に立地する中核的研究機関もこれらのプロジェクトに参画し、先端的な研究開発の一翼を担っている。

さらに、第5期科学技術基本計画（平成28（2016）年1月閣議決定）においては、ICTがさらに劇的に発展していくことが見込まれるなかで、サイバー空間と実空間（フィジカル）を融合させた取組により豊かな暮らしがもたらされる「超スマート社会」が、向かうべき未来社会の姿として示されており、その構築に向けて、社会におけるサービスを強化するための様々な事業のシステム化を戦略的に推進することや、そのためのプラットフォームの確立が位置づけられている。

また、そうした未来像を展望しながら、科学技術イノベーションの基盤的な力の強化（人材育成、学術研究と基礎研究の推進、オープンサイエンスの推進等）や、イノベーション創出に向けた好循環システムの構築（オープンイノベーションの推進、ベンチャー企業の創出、知的財産の戦略的活用等）が強調されている。

けいはんな学研都市は、先端的な研究機関や研究開発型産業施設及び支援機関等が数多く立地し、大きなポテンシャルを有していることから、今後、我が国の科学技術イノベーションの推進と新産業の創出、それを通じた国際競争力向上への寄与を一層高めていくことが必要である。

（3）国土の経営に係る潮流

① 超高齢化・人口減少社会の到来

我が国は平成20（2008）年頃をピークとして既に人口減少社会に突入しており、国の推計では、出生率が上昇しなければ、2060年には8,674万人、2100年には人口5,000万人を切ると見込まれている。大都市よりも地方圏の人口減少速度が速く、地方が「消滅」していくシナリオが現実味を帯びてきているが、大都市圏自体も人口減少をまぬかれることはできないことから、出生率を高めるための子育て環境や就業の場の確保とともに国土のバランスある人口や機能配置が必要とされている。

けいはんな学研都市は学研地区及び周辺地区ともに安定的な人口増加を続けているが、職と住のバランスある配置により、地域社会の持続性を継続していく必要がある。

② 大規模災害のリスク

また、未曾有の被害が生じた東日本大震災（平成23（2011）年）ののち、今後も首都直下地震

や南海トラフ地震が高い確率で発生する見通しであり、そのほか火山活動や異常気象による被害など、国民生活へ多大な影響を及ぼす災害の発生が危惧されている。

そのため、国土の強靱化とバランスある再配置、自立性のある地域形成が不可欠な時代となっている。けいはんな学研都市にあっても、こうした災害を想定し、都市内の防災安全性の確保はもとより、国土や関西の強靱化など広域的な防災面への配慮も必要となると考えられる。

③ 国土形成と地方創生に向けた我が国の取組

こうしたなか、国土政策分野では、国土形成計画（平成 27（2015）年 8 月）において、人口減少等の諸課題に対応するため「コンパクト＋ネットワーク」をキーワードとして、質の高いサービスの効率的な提供や新たな価値創造に向けた国土形成の方向が示されている。

特に、国際競争力を高める方策として、リニア中央新幹線で三大都市圏を結び世界最大の「スーパー・メガリージョン」を形成することが強調されるとともに、「国及び独立行政法人並びに企業の様々な研究機関、大学等が集積する筑波研究学園都市、大学、研究機関、オンリーワンの技術を有する中小企業等が集積する関西文化学術研究都市や、沿線の大学、研究機関等の連携が強化されるなど、知的対流（ナレッジ・リンク）の形成・拡大により、スーパー・メガリージョン内外のヒト、モノ、情報の高密度な連携から、高度な価値創造が行われる可能性がある。」とされている。

さらに、こうした成長戦略を地域のまちづくりに波及し、人口減少に歯止めをかけ、自立的な地域経営を進めるため、「まち・ひと・しごと創生」の取組がスタートし、各自治体においてそれに基づく事業推進の取組が進められつつある。また、国では、東京の一極集中の是正に向け政府関係機関の地方移転の取組が進められている。

こうした動向を踏まえ、けいはんな学研都市においては、スーパー・メガリージョンとナレッジ・リンクの一翼を担う研究開発拠点にふさわしい高いレベルの研究開発創出等の役割を果たすとともに、3 府県 8 市町の地方創生の取組を横断的につなぎ、新産業の創出等を通じた雇用創出や人口の定着など、持続可能な地域づくりへの役割を果たすことが求められる。

第3章 新たなステージにおける課題

けいはんな学研都市は、面開発や基盤整備が進み、人口や立地施設が増加するなかで、学研都市の多様性や厚みが大きく向上し、多様な交流も生まれてきた。また、住民が参加する実証事業が行われ、さらに、特区等を通じたオール関西の一体的な戦略推進の一翼も担ってきた。

一方、十分に達成できていない点として、集積のメリットを活かした新産業創出の成果や仕組みの構築が不十分であり、本格的なイノベーション拠点となるまでにはまだまだ道半ばであること、クラスター内やクラスター間を結ぶソフト・ハードの交通手段の向上や学研都市外とのアクセス向上はまだまだ課題が残されていることがあげられる。さらに、都市運営については「統一的で強力な推進体制の構築」までには至っていない。また、世界に向けてもさらに存在価値を高める必要もある。

こうした到達点を踏まえ、今後、長期的な視点をふまえたけいはんな学研都市の課題は、次の5つにまとめることができる。

① 多様な主体が共有できるビジョンの構築

世界の動きが加速化し、社会のあり方等が急速に変化しようとする時代にあって、けいはんな学研都市は、その歴史を踏まえた上で、国、自治体、住民、大学、研究機関、研究開発型産業施設、経済界、支援機関等の多様な関係主体が共有し、それぞれの立場で行動することのできる新たなミッションとビジョンの構築が必要となっている。

② 多様な施設立地を踏まえたイノベーションの一層の推進

科学技術の急速な進化と並行して社会システムの変革が進もうとしてしているなかで、けいはんな学研都市は、その推進の一翼を担うため、多様な立地施設の強みを活かしたイノベーション・新産業創出を強力に推進する必要がある。そのためのオープンで戦略的な研究開発のマネジメント、必要な人材の育成、広域連携、地域産業への波及など、必要な支援策や仕組みの構築が求められている。

③ 学研都市の一体性の向上や関西における役割の強化に資する都市形成の推進

超高齢化・人口減少社会が到来するなかで、けいはんな学研都市は、クラスター型開発の特徴を活かした持続可能な都市形成の1つのモデルと言えるが、この都市形成手法の利点をさらに活かしながら、広域及び都市内のインフラの着実な整備による一体性の向上とともに、各クラスターの機能の充実、快適な環境やにぎわいづくりなどを一層進める必要がある。

④ 科学技術と住民生活・文化の融合

文化学術研究施設等と住宅の複合開発であるというけいはんな学研都市の特徴を活かし、学術研究や科学技術の成果を住民生活により身近なものとし、また研究施設や企業側からは実証事業の場にするなど科学技術と住民生活の結びつきを一層の強める必要がある。さらに、日本の文化の歴史的な中心であった奈良や京都に近接していることの価値を十分に活かしながら、科学技術と住民生活・文化の融合する魅力ある都市形成を進めることが求められる。

⑤ 「高度な都市運営」の仕組みの構築

けいはんな学研都市は、3 府県 8 市町にわたるエリアで、国、大学、民間企業、公共団体、公的組織など 129 にも上る文化学術研究施設が立地してきた。また、その機能は教育、研究開発、研究開発型産業、交流やまちづくりなど多岐にわたり、その規模、扱う課題も世界的な課題から地元課題まで様々であり、それぞれ固有のミッションを持っている。また、けいはんな学研都市にはこの都市での生活を求めて移り住んできた住民や既存の住民が多様な生活を営んでいる。これらの立地機関や住民が、けいはんな学研都市への立地や居住のメリットを相互に享受しあえるよう、多様な主体の参画や広域にわたるエリアマネジメントを可能とするこの都市ならではの「高度な都市運営」の仕組みを構築していく必要がある。

第4章 新たな都市創造のビジョン

4-1 文化学術研究都市としての役割

けいはんな学研都市（関西文化学術研究都市）の建設は、学研促進法に基づき、文化、学術及び研究の中心となるべき都市を建設し、もって我が国及び世界の文化等の発展並びに国民経済の発達に資することを目的としている。

同法の施行から約30年を経過し、文化、学術、研究の中心となる都市としての機能の集積や環境整備が進んでおり、その役割を今後さらに高めていくためには、学研都市の経緯、現状、成果とその評価、時代の潮流等を勘案し文化学術研究都市として目指す方向を明らかにする必要がある。

今日、科学技術が世界のあり様を大きく変化させつつあり、世界の研究開発拠点がイノベーションの創出に向けてしのぎを削っているなかで、改めて、関係機関や住民が共有できる目標、すなわち他のサイエンスシティにはない、けいはんな学研都市独自の理念やビジョン、取組を明らかにし、関係者が共有することが重要である。

文化学術研究都市の基本的な役割として、これまでの理念を継承しつつ、相乗効果の発揮と新たな飛躍に向けて、「世界の未来への貢献」、「知と文化の創造」の2つの柱を設定する。

（1）世界の未来への貢献

今日、地球環境問題や世界経済の不均衡発展などグローバルな課題の拡大に対して、世界が共同して課題解決に向けて取り組んできている。いわば、単一的な進歩発展ではなく、人類の平和的・持続的共存に向けて、未来への新たな知恵を創出していくことが求められている。

けいはんな学研都市は当初から、学術研究を通じてこうした課題に寄与することを理念としてきたが、今後とも先端的な科学技術の進歩を担うとともに、産業化等を通じて社会の変革に役立てていくことで世界の未来に貢献することが、今日ますます重要となっている。

とりわけ、これまでの蓄積を踏まえて、i)差し迫る地球環境問題や食糧・エネルギー問題の解決に向けた貢献、ii)健康長寿や幸福など豊かな生活像の実現に向けた貢献、iii)知とコミュニケーションの拡大を通じた社会発展への貢献の役割を一層発揮するとともに、総合的な研究開発拠点として、iv)未来社会に向けた新たな課題を探求し解決に向けて貢献していくことが必要である。

また、これらを通じて、我が国の将来にわたる持続的な成長と社会の実現にも資することが求められる。

（2）知と文化の創造

サード・ステージで掲げた、けいはんな学研都市の都市像である「知の創造都市」を受け継ぎ、学術研究や産業活動、住民生活の中から、未来に向けた学研都市ならではの豊かな文化を开花させることが求められる。

けいはんな学研都市は、当初の都市建設段階では、実験的・先端的都市としての性格を「パイ

ロット・モデル都市」と表現したが、一定の居住者や立地施設が定着したサード・ステージでは、都市住民・都市生活のあり方に焦点を当て、住民や研究者の知による生産や文化の創出、新たな価値創造や発信を行う「知の創造都市」という性格付けを行った。

これを引き続きさらに進め、未来社会に向けた日常的な知の交流を通じて、豊かな好奇心を育み、目指すべき新たな価値について考え、新しい文化や生活像を生み出していく都市として、さらに豊かな可能性を開花させていくことが期待される。人々の暮らしを豊かにする科学や技術の様々な展開を地域で受けとめ、安全安心、QOL、環境、文化など、新たな生活像の可能性を探り、生み出していくことが求められる。さらに、「人」に焦点を当て、こうした取組が、立地施設に働く人々やこの地に住む人々をはじめ、多様な主体の連携によって、自律的な地域づくりとして育まれていくことが必要である。

これらを通じて、バランスのとれた国土形成や地方創生に資することが求められる。

4-2 具現化を目指す都市の姿

「世界の未来への貢献」、「知と文化の創造」の方向を踏まえ、けいはんな学研都市に関わる全ての主体が協働・連携しながら様々な取組を通じて具現化すべき都市の姿（目標）として、次の3つを設定する。

（1）世界の知と産業を牽引する都市

（世界の未来像を提示する）

けいはんな学研都市が世界の未来に貢献し、人類の平和的共存・持続的共存に寄与するためには、まず、都市が擁する自然科学、人文・社会科学などの学術研究機関や、情報通信、環境・エネルギー、医療・バイオなど様々な分野の先端的で多彩な研究機関等の総合力により、「未来社会はいかにあるべきか」「科学技術を通じてどのような未来社会づくりに貢献できるか」といった世界の未来像を提示できる都市を目指す。

（科学技術イノベーションの創造拠点となる）

また、世界経済の発展や生活文化の向上に結び付けていくためには、科学技術を通じて新たな知的・文化的価値や経済的、社会的・公共的価値を生み出す科学技術イノベーションの推進が重要な課題となっている。けいはんな学研都市は大学、研究機関、研究開発型企业等が多数集積し、国立国会図書館関西館等の知的インフラも整備されていることから、これらを活かし、研究開発のみに止まらず、その最上流となる教育・研究者育成から最下流の製品化・市場展開までを幅広く担う科学技術イノベーションの総合的な創造拠点を目指す。

（「ナレッジ・リンク」の中核となる）

さらに、科学技術イノベーションは我が国の持続的発展に向けて国をあげて取り組む課題である。三大大都市圏を結ぶ「スーパー・メガリージョン」の中で、けいはんな学研都市が他の創造拠点と密接に結び付きながら「ナレッジ・リンク」を形成し、国土の2眼構造における関西の中核的な科学技術イノベーション拠点として新たな価値創造を世界に発信していく。

(2) 持続的にイノベーションを生み出す都市

(好循環を生み出す仕組みを備える)

科学技術イノベーションを通じ新たな産業や企業群を持続的に生み出していくためには、単に研究開発機関だけではなく、国、自治体、企業、経済界、金融機関、文化の担い手等の様々な主体がそれぞれの特徴（モチベーション・行動様式・得意技）を活かして自律的に活動しつつ連携しながらイノベーション創出を加速する仕組みが必要であり、新たなステージにおける持続的な価値創造の土台となる仕組みを備えた都市を目指す。

(オープンイノベーションとインキュベーションの仕組みを備える)

また、新産業創出に向けては、企業や研究機関が目的に応じて外部の多様な要素（知識、手段、資源、アイデア等）を新しい形で取り入れ、あるいは自らの知恵を外部に公開しながら、相互に結びつくオープンイノベーションの仕組みや、新規起業に関する全てのニーズや段階をバックアップするインキュベーションの仕組みも不可欠である。

これらの仕組みの構築を通じて、科学技術の成果を活かした新規起業が進み、学研都市内に止まらず近隣や広く関西に立地する企業が新産業を持続的に生み出し続ける都市・地域を目指す。

(歴史・文化と結びついたイノベーションが生まれる)

さらに、京阪奈地域一帯の歴史や文化的土壌といったけいはんな学研都市の特長を活かし、歴史や文化と結びついたイノベーションが生み出される都市を目指す。

(3) 科学・生活・文化・自然環境が融合する持続可能都市

(科学技術と生活・文化が融合した未来の社会を先導する)

けいはんな学研都市では、環境・エネルギー、健康の分野などで、住民と連携した社会実証事業など科学技術を暮らしに活かす様々なプロジェクトが推進されてきた。

今後、環境・エネルギー、交通などのインフラ分野のみならず、健康、食、文化、教育など様々な産業分野において、ICTなどの新たな科学技術の活用が飛躍的に広がると見込まれるなかで、社会実証事業などで得られた蓄積を活用し、生活の質を高めることができ、真の豊かさや文化的価値を創造することのできる都市を目指す。

(持続可能な都市整備の仕組みを備える)

けいはんな学研都市の都市建設手法の特徴であるクラスター型の開発は、骨格的なインフラ等に関する基本的事項を定めた上で、個々のクラスターについては、開発主体が、社会ニーズに柔軟に対応しながら段階的に都市整備を進めており、結果として持続的で緩やかな人口増加と施設の立地を実現している。

このような都市の持続可能性を高める都市整備の仕組みを備える都市を目指す。

(安全・安心で高質な都市環境を備える)

我が国は、人口減少社会、世界に先駆けた超高齢社会に突入している。一方、これまで以上に国際化が進展していくと見込まれるなか、安心・安全な都市環境はもとより、周辺の自然環境や文化歴史を暮らしの中で享受でき、快適で、利便が高く、外国人も暮らしやすい生活環境等、質の高い都市環境を備えることで、人を惹きつけ、人が暮らし続けられる持続可能性を有する都市の実現を目指す。また、大災害の危機を孕む時代にあって、首都機能のバックアップ機能も含め

て、強靱で持続可能な国土、地域づくりに貢献する都市を目指す。

（広域的なエリアマネジメントの仕組みを備える）

けいはんな学研都市では、住民だけでなく、立地機関によるクラスターごとのまちづくり協議会等が、地域の特性に応じまちの維持、運営に係る多様な活動（エリアマネジメント）を展開している。

新たなステージにおいては、こうした個別のクラスターごとの団体による活動だけでなく、既存の組織のネットワーク化により各団体が広域的な連携、交流を容易にし、多様な活動を背景とする持続性の高い都市を目指す。

第5章 ビジョン実現に向けた取組

(4つの取組)

前章では、けいはんな学研都市が目指すべき方向として、新たな都市創造のビジョンを描いた。そこではまず、「文化学術研究都市」と名付けられた本都市の基本的な役割が「世界の未来への貢献」と「知と文化の創造」の2つにあるとし、その役割を發揮するために具現化を目指す都市の姿として「世界の知と産業を牽引する都市」「持続的にイノベーションを生み出す都市」「科学・生活・文化・自然環境が融合する持続可能都市」の3つの柱を定めた。これら3つの柱は、それぞれ、文化・学術研究、産業、生活・都市環境といったけいはんな学研都市において取組むべき事項の基本的な方向性を示したものと見える。

従って、この章では、この新たな都市創造のビジョンを実現していく上で必要な取組として、3つの柱に概ね対応した「文化・学術研究の振興」、「イノベーション推進」、「都市形成」の3つの取組と、さらにこの3つを包括的に推進するための共通の基盤となる「都市運営」の、合計4つの取組を設定する。これらは相互に関係しながら、新たな都市創造のビジョンの実現に寄与するものとする。

1 文化・学術研究の振興

主に「世界の知と産業を牽引する都市」の実現に向けて、世界の知を牽引する自然科学、人文・社会科学等の「文化・学術研究の振興」の取組を方向づける。

2 イノベーション推進

主に「世界の知と産業を牽引する都市」と「持続的にイノベーションを生み出す都市」の実現に向けて、先端的な研究開発から新産業創出に至るプロセスを持続的に進めるため、「イノベーション推進」の取組を方向づける。

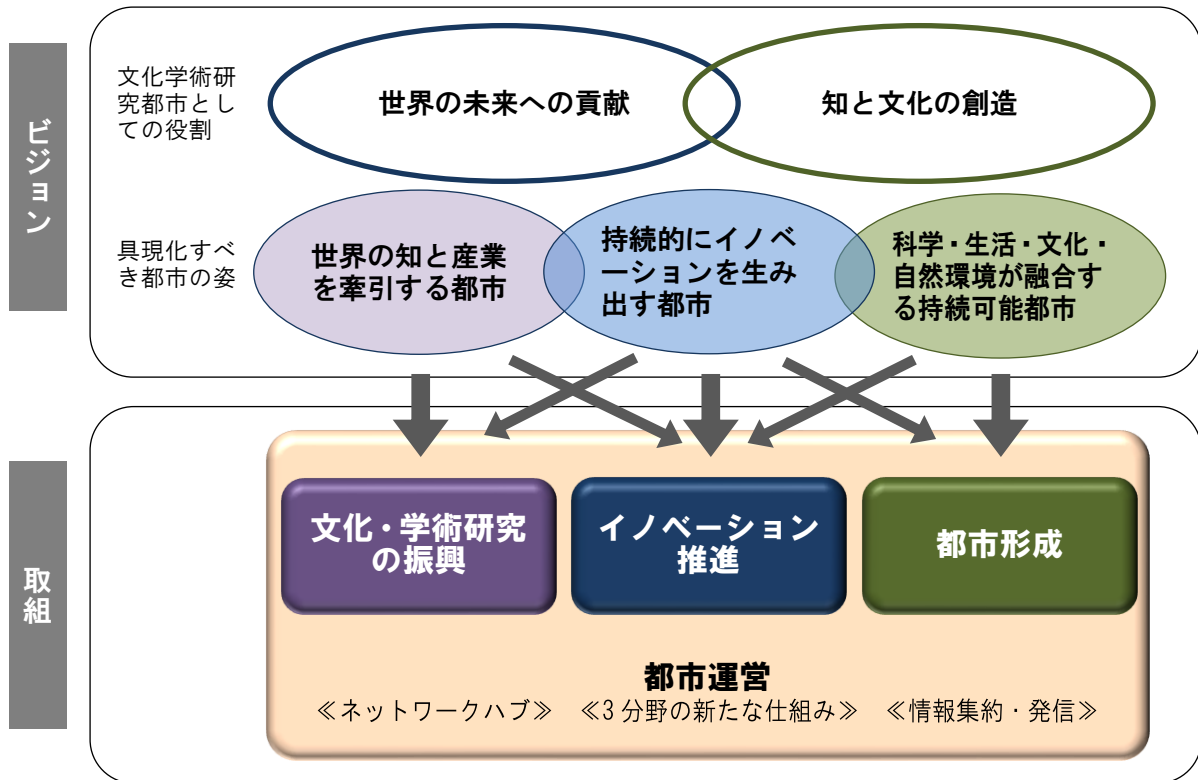
3 都市形成

主に「科学・生活・文化・自然環境が融合する持続可能都市」の実現に向けて、豊かな都市空間の形成や自律的な都市活動の推進を図るため、「都市形成」の取組を方向づける。

4 都市運営

新たな都市創造に向けた取組を的確に推進していくため、多様な関係主体の連携の要となるネットワークハブの構築、上記3つの分野を推進するための連携・協働による新たな仕組みの構築、都市運営の基盤となり本都市についての国内外の一層の理解を深めるための情報の集約及び発信の仕組みの構築を方向づける。

■ビジョンと取組

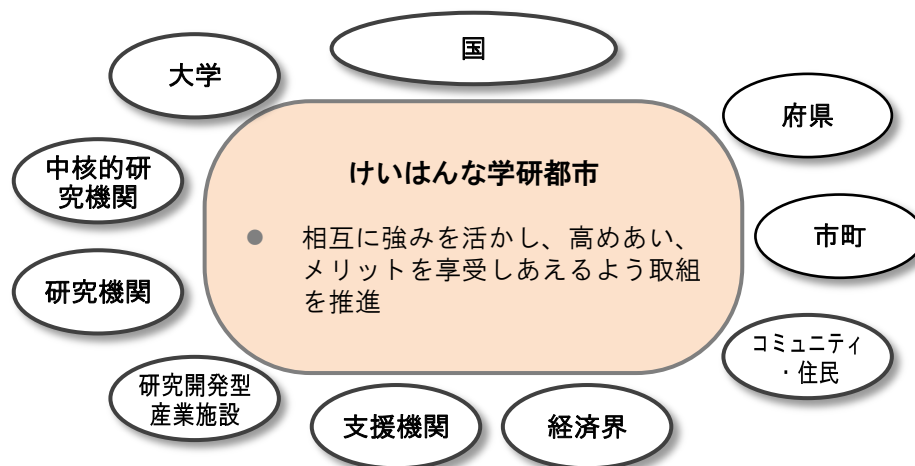


(取組推進の視点)

取組を行うに当たっては、それぞれが固有のミッションを持ち、その実現に向けた活動を行っている立地機関等が、相互に強みを生かし、相互に高めあい、そのことによって相互にメリットを享受しあい、これらの連携・協力によりけいはんな学研都市の魅力が高まり、その魅力を求めてさらなる新たな施設が立地し、ますます先進性と多様性を兼ね備えた強靱な地域となっていくという好循環を生み出すよう取り組む。

また、この地域に住む多くの住民の方々にとっても学研都市に居住しているメリットが感じられるような取組が行われ、立地機関等の側からも次世代エネルギー・社会システム実証プロジェクトで行ったような住民と協働した取組ができるようにするなど、住民、立地機関等それぞれが相互にメリットを享受し合うようにしていく。

■多様な主体による取組の推進



5-1 文化・学術研究の振興

主に「世界の知と産業を牽引する都市」の実現に向け、知のフロンティアの開拓を通じて世界の未来像の提示や新たな価値創造への基盤となる「文化・学術研究の振興」を設定する。

近代科学技術は、物資の生産技術を機械化し、人間による自然資源の利用効率を高めることで物的豊かさを実現する人類共通の手段であり、国境を越えてグローバルに広がってきた。しかし現下、近代科学技術の発展が人類社会に予想外の好ましからざる結果や深刻な問い—例えば地球温暖化に代表される環境破壊、医療技術の進展に伴う人間の尊厳の問題、人工知能に代表されるIT技術の進展に伴う「人間とは何か」との問い—をもたらしていることが認識されてきている。

文化・学術研究は、科学技術を手段としてこの数世紀に亘って「拡大・成長」を追求した「外向き」の意識を、内側すなわち人間の内面に向けることで、科学技術のあり方を問い直し、人類社会を新たなステージに導くよすがとなりうるということが指摘されている。

けいはんな学研都市は、設立当初から「創造的、かつ国際的、学際的、業際的な文化・学術・研究の新たな展開の拠点づくりを目指す」ことを理念とし、また、古来の文化を色濃く残す地域に立地する。こうした特色を生かし、岐路に立つ日本及び世界に対し、文理、産学官民が融合して、人類社会が新たなステージに入るためにどのような社会—世界の未来像—を目指し、何に取り組むべきかを明らかにするような文化・学術研究の振興を目指す。

(1) 知のフロンティアを開拓する学術研究の振興

① 取組の必要性

資本主義と結びついて物的成長・拡大を追求してきた近代科学技術が自然環境の制約に直面する中、人間の内面・精神世界を探求する文化・学術研究の現代的意義を明確にし、広く世界に発信していく必要がある。従来、ともしれば切り離されてきた産業界と文化・学術研究とが相互に補完しうる関係にあり、文化・学術研究が近代科学技術の問題を明らかにするとともにその解決策を示しうることを意識した学術研究の拡充が求められる。また、そのことを通じて、「未来に向けて何を研究すべきか」を問いかけ、広く世界に問題提起していく拠点としての機能を充実していく必要がある。

さらに、差し迫る地球環境問題をはじめとする持続可能社会に向けた多面的な学術研究については、けいはんな学研都市の中心的なテーマとして、これまでの成果を引き継ぎながら推進する必要がある。

また、けいはんな学研都市に立地する大学、研究機関等においては、優れた学術研究成果を生み出す持続的なサイクルを形成していく上で、担い手となる人材育成が重要な課題となっていることから、関係機関の連携等による仕組みを整えていく必要がある。

② 取組の方向

(融合による学術研究の推進)

近代科学技術がもたらした現下の課題は、近代科学の枠組みのみでは解きがたい。そこで、近代科学と近代科学の枠の外にある文化や純粹真理を追求する方法論の融合としての学術研究にそ

の解決が期待される。

そのような知のフロンティアを開拓する学術研究は、他の学術分野との融合などを通じて新たな学術領域を生み出すとともに、産業分野における新たなイノベーション創造の源泉ともなるものである。けいはんな学研都市に立地する数多くの大学や学術研究機関等が相互に連携し、大型情報提供施設である国立国会図書館関西館等を活用しながら、新たな知のフロンティアを開拓する拠点としての機能を一層充実する。

また、文理、産学官民、国内外というように、バックグラウンド・価値観が異なる機関・個人が連携し異種融合することにより、ポスト現代社会における新たな文化・学術研究のあり方を問い、科学技術、経済社会、産業界に影響を及ぼしうる成果を追求する。

（幅広い学術研究の連携による世界の未来像へのアプローチ）

けいはんな学研都市に立地する大学・研究機関はもとより、国内外の学術研究機関も含めて、自然科学、人文・社会科学の横断的な連携により「世界の未来像」についての多面的な研究の推進を図る。特に、国際高等研究所はその重要な役割を担う。

（持続可能社会のための科学の推進）

持続可能社会に向けた学術研究の推進に向け、それぞれの研究機関において、低炭素社会の実現に向けた環境・エネルギー問題の解決、地球規模での人口・食糧・水問題の解決、医療や脳科学などのライフサイエンス分野など、先端的で多面的な学術研究の展開を促進する。

（人材育成）

次代を担う若手専門人材や文理融合の担い手となる専門人材育成が重要な課題となっていることから、大学、研究機関等と学研都市内に立地する企業、支援機関等との連携により、フィールドと結びついた生きた研究の場の提供や、問題を多面的に捉えるための様々な学者、行政、企業、住民との交流と対話の場づくりなどに努める。

（２）科学と結びついたけいはんなならではの文化の創造

① 取組の必要性

けいはんな学研都市は奈良や京都といった歴史地域に囲まれ日本古来の文化を色濃く残す地域に立地しており、その風土を背景としながら、先端的な文化学術研究が展開され、実証事業等を通じて科学技術と結びついた新たな文化が生み出されつつある。従って、今後とも多面的な融合を促進し、けいはんなならではの未来に向けた豊かな文化の創造を進めていくことが求められる。

そのために、テクノロジーを活かした新たな文化の創造や歴史文化の継承を促進するとともに、住民生活においてこれらを活かした豊かな知的文化や生活文化を育んでいくプログラムの充実などが求められる。

② 取組の方向

（科学技術と文化の融合）

ICTをはじめとする科学技術の進歩によって文化・芸術の面でも新たな表現が可能となっており、けいはんな学研都市においても、歴史遺産のデジタルアーカイブ構築に向けた裸眼立体視技術や異言語間の同時コミュニケーションに資する多言語自動翻訳技術などが実現している。

こうした可能性は今後ますます高まるものと考えられる。

そのため、今後とも人々の QOL を高め、新たな文化を生み出すという観点からテクノロジーと文化の融合に向けた取組を進める。

（歴史文化研究拠点としての役割発揮）

日本の古代国家形成の地、平城宮跡の調査研究を通して、文化財の保存・修復・活用技術の開発を推進してきた奈良文化財研究所や京都国立博物館（文化財の保存修復や保管環境に関する研究を行う機関として KICK へ入居）などを中心として、けいはんなならではの歴史文化研究拠点としての役割を一層発揮する。

（学術・科学に関する教育、学習プログラム等の推進）

暮らしの中で文化、学術、科学を身近なものにしていくため、様々な「知」を楽しむプログラムとして、例えば、体験型の科学学習や文化学術研究に関する各種イベント、研究機関と学校教育機関との交流・連携による科学教育の支援などを進める。これらを通じて住民や様々な来訪者（産業、文化・芸術、観光等）とけいはんな学研都市との日常的な結びつきを強めていく。

また、こうしたプログラム等を通じて科学技術と住民の乖離を解消し、科学の成果を人々が適切に受容できる社会を実現するため、専門家と非専門家の上に立つて科学技術の媒介を行うサイエンス・メディアーターの育成や活用を図る。

5-2 イノベーション推進

「世界の知と産業を牽引する都市」、「持続的にイノベーションを生み出す都市」等を実現するためには、大学や中核的研究機関等による優れた研究開発成果を活用した新たな産業が創出され、システム、サービスや製品という形となって社会に新たな価値として還元されるとともに、研究開発や産業化の拡大に伴い優れた人材が集まり、育成され、新たな研究開発が展開されるという好循環、プラスのスパイラルが形成されることが必要と考えられる。

そのため、情報通信、環境・エネルギー、医療・バイオなど各分野において、大学、中核的研究機関、民間研究機関等の革新的な研究開発を一層推進するとともに、そうした研究開発成果を活かした実用化・産業化をバックアップするため、社会の未来像を見据えた研究開発の構築力、都市内外との連携力や対外的なアピール力など、けいはんな学研都市の総合力を高める取組が必要である。

そこで、これまで取り組んできた若手・中堅研究者間の交流事業等を引き続き促進することに加え、研究所長等トップクラスの交流の場も設けることなどにより、「新たな気づき」等により未来を見据えた世界をリードする研究開発の芽を育てていく。

また、i)研究開発から実用化・産業化を一元的に支援できる仕組みを新たに構築するとともに、ii)関西の各研究開発拠点・支援機関とのネットワーク構築や、けいはんな学研都市が新たに開拓していくべき研究開発分野をリードする国等の研究機関等、筑波研究学園都市との連携強化、iii)さらには海外の大学、研究機関、企業との交流・連携など、広範なナレッジ・リンクを形成して、国際的な競争力を持つ研究開発力の強化を図る。

(1) イノベーション推進の中核となる仕組みの構築

① 取組の必要性

「持続的にイノベーションを生み出す都市」等となるためには、まず、けいはんな学研都市の新たな科学技術を活用してマーケットが求める新しい製品・サービスのアイデアを生み出し実用化・産業化を推進する切れ目のないプロセスが必要と考えられる。しかし、今日、以前とは異なり、将来のマーケット予想が難しく、単一の技術に特化して新たな製品やサービスを生み出すことが困難な状況にある。

そのため、研究開発の核となる大学や中核的研究機関、民間研究機関や企業、各種サポート機関などの多様な主体が自らの強みを核に産業創出に向けて WIN-WIN の関係を前提に交流・連携し、戦略的に組織外の知識や技術を積極的に取り込むオープンイノベーションの取組を基軸に、本都市の特色でもある住民参加や特区制度の活用の視点も踏まえて、新たな価値が創造できるような仕組みを構築することが必要と考えられる。

しかしながら、現状は研究会や交流会レベルの交流・連携は行われているものの、立地機関の課題やニーズをしっかりと受け止めた上で、イノベーション創出に向けた実効性のある連携を進め、アリーステージから産業化に至るまで包括的に支援を行うためのハブとなる仕組み・組織がなく、また特区制度の有効活用など、けいはんなのメリットを活かす取組も十分に行われていない。

② 取組の方向

(オープンイノベーションを基軸とし、プロジェクトの創出と推進を一元的にサポートできる仕組みの構築)

オープンイノベーションを基軸に、けいはんな学研都市の科学技術を活用し、マーケットのニーズに応じた新たな製品やサービス等の実用化・産業化を切れ目なく進めるため、研究開発の戦略構築から、知財や秘密保持契約に関する支援、組織間連携課題の解決、プロジェクトインフラ構築、マーケティングサポートまでの機能を有し、新たなプロジェクトの創出と推進を一元的にサポートできる仕組みを構築していく。

こうした仕組みの構築により、立地機関が単独では解決しえない課題に対応できる産学連携プロジェクトや国プロジェクトの継続的な創出を図るとともに、オープンイノベーション推進の中核拠点であるけいはんなオープンイノベーションセンター (KICK) 等を有効に活用してプロジェクトを推進し、実用化を加速していく。

また、けいはんな学研都市内のインキュベーション施設 (けいはんなプラザや同志社大学の D-egg 等) の入居企業をはじめ、中小・ベンチャー企業への情報提供、交流・マッチング支援、人材育成等の個別支援を本都市周辺の支援機関とも連携して引き続き行うとともに、新たに構築する一元的サポートの仕組みも活用して、研究開発のコンセプトづくり支援や、大学や企業との連携支援による共同研究開発等の促進を図り、実用化・産業化を加速していく。

(特区、住民参加等、けいはんな学研都市の優位性を活かした取組の推進)

各プロジェクトの推進に当たって、国の規制等が開発の支障となるような場合には、けいはんな学研都市の利点 (優位性) の一つである特区の有効活用が図られるよう積極的に支援を行うとともに、地域実証等への住民の積極的参加により、住民のニーズも踏まえた研究開発が一層促進されるよう、日頃からの住民と研究機関・企業の交流を通じて、科学技術等への関心をさらに高

めていく。

これらの取組を通じて、けいはんな学研都市においてイノベーション推進による新たな価値創造、産業創出を持続的に図っていく。

（２）研究拠点や地域産業との連携

① 取組の必要性

「世界の知と産業を牽引」し、革新的な研究開発と産業創出を推進するためには、けいはんな学研都市内での連携だけでは不十分であり、他の研究機関等の幅広い「知」や「技術」を活用し、相乗効果を高め、高い水準の成果を達成することが必要であると考えられる。特に、関西においては、関西イノベーション国際戦略総合特区、関西圏国家戦略特区など関西活性化に向けた横断的な取組が進められており、さらに今後は、スーパー・メガリージョンの形成に向けて、関西は首都圏と並び立つ「極」の一つとなり、グローバルな地域間競争を勝ち抜くことが必要となると考えられる。

また、地域の研究開発拠点として、地域の中小企業、大学、公的研究機関、自治体等が集まる共同研究開発の場をつくり、地方創生に資するイノベーションを推進する役割も期待されている。

そのため、「関西」の冠を有する研究開発拠点として、関西全体のイノベーション推進の総合力を高めるという視点に立ち、研究シーズに関する情報交流、コンソーシアム形成、さらには共同研究開発の促進など、他の研究開発拠点・支援機関等との連携を一層強める必要がある。

② 取組の方向

（関西の研究拠点や筑波研究学園都市等と「知」のネットワークの構築）

関西活性化に向けた強力なエンジンの一つとしての役割を果たすため、産業技術総合研究所等の国の研究機関とも連携して府県域を超えた関西全体のイノベーション支援機関のネットワークの構築や、国家プロジェクトであるサイエンスシティとして国等の研究機関によるけいはんな学研都市における研究機能の強化、公的研究機関の誘致等とともに、ロボット関連技術など本都市と共通の研究開発シーズを有し、また、特にアグリ・バイオ関係については農水関係の国の研究機関が集中立地する筑波研究学園都市とも連携し、支援機関間の情報共有、コーディネーター交流の場づくり、機能の相互活用等により、研究開発の支援力を強化していく。

（地域産業との連携）

けいはんな学研都市が有する研究開発の支援力や研究シーズを活かし、地域の産業活性化に資する産学官民の共同研究開発を進めるとともに、関西に集積立地する研究開発や産業化を支える産業集積地区との結びつきを強めるなど、地域産業との連携を図ることにより網の目のような柔軟で強靱なイノベーションエリアを形成する。

（３）世界への展開

① 取組の必要性

「世界の知と産業を牽引」し、経済のグローバル化や世界経済の構造変化に対応するためには、文字通り世界との研究開発や産業化に関するチャンネルを一層拡大することが必要と考えられる。

けいはんな学研都市に立地する研究機関や企業では、海外研究機関・企業との共同研究開発や海外マーケットの開拓などそれぞれ独自の海外展開を旺盛に進めているところも多いが、一方、けいはんな学研都市としては、これまで世界の大学やサイエンスパークとの交流を図ってきたものの、まだ会議やイベントへの参加等の一般的な交流の域に止まっている。そのため、単に交流だけでなく、海外大学や機関・企業との共同研究開発に向けての取組など、世界への展開を一層推進することが必要と考えられる。

その際、アジアへの視点は重要となる。急速に経済成長している中国をはじめとするアジア諸国は、研究開発や新産業創出にも注力しており、また先端技術を導入した情報インフラや環境インフラなど、まさに研究開発の実証事業の場ともなっている。そのため、マーケットとしての見方だけではなく、研究開発上でもアジアとのチャンネルを強めることが重要となっていると考えられる。

② 取組の方向

（国際的な認知度向上や国際会議や学会等の誘致）

今後、学術研究の分野はもとより、産業やビジネスの分野でも、世界とのつながりを一層強化するため、立地機関の研究連携やビジネス連携に役立つグローバルなネットワークづくり、情報提供、PR ツールづくり、マッチング機能などの支援を強化していく。

このため、海外のサイエンスパークとの交流・連携を通じて、けいはんな学研都市の国際的な認知度向上を図り、立地機関の海外展開の支援につなげる。また、海外から多くの文化、学術研究、経済関係者等が集い活発な交流を促進する環境を整備するため、けいはんな学研都市にふさわしい国際会議や学会、セミナー等を積極的に誘致する。

（海外の教育・研究機関、企業の誘致促進）

また、グローバルに展開する海外の研究機関や企業のけいはんな学研都市への誘致を進めることにより、けいはんな学研都市の研究開発領域の幅の拡大や、国際的連携のチャンネル強化につなげるとともに、関連産業の集積などの波及効果を高めていく。

また、国際的な人材育成・人材交流を推進するため、海外の有力なボーディングスクールなどの教育機関の誘致を図る。

さらに、こうした取組の推進に伴い、本都市を訪問、あるいは滞在・居住される外国人研究者等が増加することが想定されることから、これらの方々及びその家族への生活・居住支援と教育環境や就業先の確保等についても取組を進めていく。

5-3 都市形成

主に「科学・生活・文化・自然環境が融合する持続可能都市」の実現に向けて、「都市形成」に関する4つの取組を設定する。「都市形成」は、自治体のまちづくりと密接に結びつきながら進めていく取組である。

まず、未来に向けた都市と生活のあり方として、けいはんなならではの歴史文化やICTなどの科学技術を生活に活かすことで住民のQOLを高める「世界に先駆けスマートな暮らしを育むま

ちづくり」を1つ目の取組とするとともに、地域の優れた資産を活かした「世界に誇る歴史や文化、自然の息づくまちづくり」を2つ目の取組として設定する。

また、持続可能な都市づくりとして、土地利用の面から、クラスター型開発の特徴を活かしてイノベーション創出の基盤となる「都市の多様性を高める土地利用の推進」を3つ目の取組として設定するとともに、交通基盤の面から、国内外の交流や、科学・生活・文化・自然環境の多様な融合を促すための「対流を促進する都市モビリティの向上」を4つ目の取組として設定する。

(1) 世界に先駆けスマートな暮らしを育むまちづくり

① 取組の必要性

「科学・生活・文化・自然環境が融合する持続可能都市」等となるためには、地域が持つ歴史や文化、自然など優れた資源や環境を活かしながら、科学技術を住民の生活や文化の中に積極的に活かしていくことが重要である。

けいはんな学研都市においては、環境・エネルギー、ヘルスケアの実証事業等を通じて住民のなかに新たな価値観を受け入れる土壌や未来のライフスタイルへの指向が育っていることもあり、そうした蓄積を活かし、世界に先駆け未来の暮らしのモデルとなるような、科学・生活・文化・自然環境の融合を通じた新たなライフスタイル（スマートな暮らし）を、地域社会に実装し育んでいくことが、持続可能なまちづくりを実現する上で必要である。

② 取組の方向

(ICTを活用し生活の質を高める暮らしの推進)

けいはんな学研都市では、環境・エネルギーをテーマとした次世代エネルギー・社会システム実証プロジェクトやけいはんなエコシティ推進会議の活動、あるいはヘルスケアをテーマとする地域イノベーション戦略支援プログラム等の活動を通じて、エコや健康に関する先進的な取組が進められてきた。

この成果等も踏まえ、急速に進化するICTを活用しながら、環境・エネルギー分野のみならず、交通システムも含めたインフラへの幅広い活用、健康、食、農業、文化、教育などすそ野の広い産業分野におけるイノベーションへの活用、快適な都市環境形成など、外国人も含めた住民の生活の質の向上を追求できる地域社会やより快適な暮らしの実現に向けた取組を進める。

(2) 世界に誇る歴史や文化、自然の息づくまちづくり

① 取組の必要性

けいはんな学研都市は、歴史的な文化資源が豊富な奈良や京都といった歴史地域に囲まれおり、特に、古代の平城宮跡自体を文化学術研究地区としてクラスターの一つに位置づけ、優れた文化遺産を備えるのみならず国際的にも先端的な文化財研究を展開する、他には見られない特徴を備えたサイエンスシティである。

また、都市内には、うるおいのある河川が流れ、緑豊かな生態系を擁する里山的環境がクラスター周辺の丘陵地には残されており、住民による自然の保全・活用の活動も進められている。さらに、都市の建設に際しては、計画的に公園・緑地はもとより、多彩な自然環境のきめ細かい導

入が図られている。

このような、けいはんなの圏域固有の資源を活かし、高質な都市環境を備える都市を実現するため、歴史・文化・自然が身近に感じられるまちづくりを進めていく必要がある。

② 取組の方向

(日本古来の歴史や文化を身近に感じられる暮らし)

平城宮跡をはじめとする当圏域の歴史的文化的資源や我が国の古代からの歴史の主要舞台となった豊かな文化的土壌を暮らしの中にも活かすとともに、けいはんな学研都市の魅力を一層高めることや新たな文化の創造に活用していく。

(圏域一帯の豊かな自然環境を活かした活動の推進)

地域の周囲に広がる里山などの自然環境を保全し、また日常生活の中で自然の豊かさに触れることができるよう、市民や企業等による主体的な活動を推進する。

(3) 都市の多様性を高める土地利用の推進

① 取組の必要性

けいはんな学研都市が「持続的にイノベーションを生み出す都市」となるためには、i)今まで以上に多様性を備える都市となり、ii)従来にはなかった切り口での交流や連携が生まれることが重要な要素である。そのためには、それぞれのクラスターの特徴や現状の整備段階に即して、基礎研究から研究開発、ものづくりまで社会の需要に応じて一層多様な土地利用の実現に向け施設立地を戦略的に誘導することが重要である。

また、近年、施設立地が急速に進み、基盤整備が完了した土地のストックは減少してきている。そのため、学研都市の成果、集積を一層活かし、機能連携による相乗効果も期待できるような施設の導入検討や、施設立地の受け皿となる都市基盤の整備を推進することが必要である。

その際、けいはんな学研都市におけるクラスター型の開発は、社会ニーズや変化を見極めながら的確な都市整備を進めていくものであり、持続可能な都市形成を進める上で非常に有効な手法であることから、今後ともこの手法に基づき都市整備を推進する。

② 取組の方向

(多様な施設の立地推進と機能連携)

研究機関の集積やオープンイノベーション拠点等を活かし、国際的な競争力を持つ研究開発力の強化を図るため、今後けいはんな学研都市が新たに開拓していくべき研究開発分野をリードする研究機関等の誘致に向けて取り組んでいく。

さらに、都市の多様性と機能連携を一層高めるため、学研都市におけるイノベーション、新産業の創出、我が国のものづくり産業の振興及び関西の目指すものづくり拠点への貢献と言った観点から、基礎研究、研究開発、研究開発型産業施設に加え、これら施設等との機能連携を目指し、学研都市の成果、集積がより発揮できるような生産施設等の導入の検討を進める。

また、学術研究交流、経済交流等の進展に伴い不足の傾向が顕著となっている宿泊研修機能を強化するため、ホテル、展示施設等コンベンション機能の充実、強化を図る。

(基盤整備が完了していない地区の整備等推進)

今後、けいはんな学研都市の建設を推進し、本都市に必要とされる研究開発機能や産業機能、都市サービス機能、住宅機能等の導入を推進するため、基盤整備が完了していない地区の事業化に向けた検討が必要である。南田辺・狛田地区の未整備区域については、民間活力の導入により早期の事業化を、高山地区の未整備区域についても早期の事業化を図る。

(4) 国内外の対流を促進する都市モビリティの向上

① 取組の必要性

けいはんな学研都市が「持続的にイノベーションが生み出す都市」、「科学・生活・文化・自然環境が融合する持続可能都市」となるためには、交通網の強化が重要な鍵となる。具体的には、国際的なサイエンスシティとして国内外との交流・連携やイノベーションを生み出す上での各主体間の日常的な交流・連携等を支える快適で利便性の高い移動手段の確保とともに、けいはんな学研都市内外の歴史文化資源や自然環境に日常的に触れることができるようクラスター相互や周辺市街地との間の移動手段を強化することが重要である。

さらに、今後、都市内の人口や立地施設の増加に伴う通勤通学や学研都市外との交流等ともなう交通需要がさらに増加していくことが想定される。

こうしたことから、鉄道網、圏域内外の道路網の整備促進を図るとともに、公共交通をはじめとする多様な交通サービスの提供により都市モビリティの向上を進める。

② 取組の方向

(国土軸、関西国際空港、母都市とのアクセス強化)

道路では、第二京阪道路及び京奈和自動車道(京都府域)、新名神高速道路(城陽～八幡間が平成28(2016)年度開通予定)により、学研都市を取り囲む高速道路網が近く完成する見込みである。

その整備効果を最大限活用しけいはんな学研都市と国土軸との接続強化、関西国際空港や京都市・大阪市・奈良市へのアクセス強化を図るため、けいはんな学研都市の東西軸である国道163号(学研都市連絡道路)、南北軸である山手幹線、奈良市域方面と結ぶ大和中央道などの主要道路の未整備区間の整備を促進する。

鉄道網については、JR片町線(学研都市線)及びJR奈良線の複線化を促進するとともに、京阪神圏において中期的に望まれる鉄道ネットワークを構成する新たな路線として位置づけられている近鉄けいはんな線の延伸について協議を進める。

(中心地区とクラスター、クラスター相互のネットワーク強化)

国道163号、山手幹線等の広域幹線道路は、クラスター間の接続強化にも大きく寄与する道路であり、その整備を引き続き促進していく。また、基盤整備未着手地区の整備等と合わせ計画道路の整備を促進する。

(公共交通サービスの充実とICTを活用した交通システム等の導入検討)

けいはんな学研都市内の施設立地の増加に伴い、通勤等の交通需要が今後とも増加することが見込まれることから、都市内の主要駅からのフィーダー交通や、本都市と母都市、関西国際空港とを結ぶ公共交通サービスの充実を図る。

また、都市内の移動交通の利便性、快適性を一層高めるため、クラスター内のゆとりある道路

空間や先進的な ICT 分野の機関の集積を活用し、主要駅とクラスター、クラスター内の利便性を高めるため、ICT を活用した次世代型の連節バス、カーシェアリングシステムの導入など、新たな交通システムやサービスの展開を図る。

（スーパー・メガリージョンとナレッジ・リンクの形成に資するインフラ整備の検討）

将来のナレッジ・リンクの形成に向けて、リニア中央新幹線の駅位置等が定まった段階においては、それと合わせた総合的な交通体系のあり方を検討する。

5-4 都市運営

けいはんな学研都市においては、立地機関は大学、研究機関、民間企業、支援機関等からなり、行政区分も3府県8市町に跨り、それぞれの主体がそれぞれのミッションのもとに活動を進めている。また、産学官民の連携による実証事業や、立地機関による地区ごとのまちづくり協議会の取組、立地機関と住民が協働した NPO 等の取組など、様々な取組が行われており、まちづくりに広く住民や立地機関、行政が連携して関与する素地がある。

こうした背景のもと、5-1~3 に示す文化・学術研究の振興、イノベーション推進、都市形成といった広範にわたる取組を推進し、新たな都市創造のビジョンを総体として実現するためには、けいはんな学研都市においてそれぞれのミッションに基づき活動している立地機関や本都市に居住する住民が、i)本都市に立地し居住するメリットを相互に享受でき、ii)相乗効果により学研都市としての総合力を高めることができるよう、本都市としての大きな方向性を共有し、取組を推進していくことのできる新たな仕組みを構築していくことが必要であり、具体的には以下のような役割を果たすことが重要である。

- ・ 立地機関、行政、支援機関等の情報共有と相互理解を深める
- ・ 立地機関間や住民、他地域の関連する機関や施設との交流を強める
- ・ 立地機関それぞれの強みを相互に協働して活用し合う
- ・ 国、関西圏域など広域で学研都市の強みを活かし高める
- ・ 取組に応じた適切な進捗管理（PDCA）を行う

多様な主体の集合体であるけいはんな学研都市においては、ピラミッド型の一元的な権限を有する主体は存在し得ないことから、国、府県、市町、住民、大学、研究機関、民間企業、経済界、支援機関など異なるミッションや運営形態を持つ機関の自律的で多様な取組を促進するため、立地機関等が対等な立場で参画し、対等な関係を保ちながら新たな連携を生み出し、連携を通じた相乗効果のメリットを享受できるネットワーク型の運営体制とすることが相応しいと考えられる。

そこで、新たな運営体制として、i)新たな都市創造の取組に係る進捗や課題、都市の現状、社会動向などの情報等を各主体が共有し、さらなる取組の展開を示すことができるよう本都市全体を緩やかに束ねていくことのできるネットワーク&ハブ機能を備えるとともに、ii)各主体が連携し、強みを活かしながら、それぞれの分野における取組を推進していくことができるような仕組み、iii)都市運営の共通基盤となる情報の集約、発信を推進する仕組みを構築するものとする。

なお、この新たな体制は、必要に応じ既存の組織等とも連携し、その機能を発揮してくものとする。

(1) 新たな都市創造に向けたネットワークハブの構築 — 新たな都市創造会議

新たな都市創造を推進するため、けいはんな学研都市の関係主体をネットワークし、ハブとなる組織として、新たな都市創造会議を創設する。

その基本的な役割は、次の2点である。

ア 情報及び認識の共有

本都市においては多様な主体により多岐にわたる取組が推進されることから、各々の取組が相乗効果を発揮し、具体的な連携等にもつなげることができるよう、本都市の人口及び施設立地等の現状や動向、本都市が踏まえるべき社会の動向や時代潮流の変化、並びに各分野における取組の進捗など都市運営の基盤となる情報の共有や、取組を推進する上での課題等に関する認識共有の役割を担う。

イ 取組の評価及びさらなる展開方向の決定等

文化・学術研究の振興、イノベーション推進、都市形成、都市運営の各分野における各主体の取組の成果について、けいはんな学研都市全体を俯瞰した視点及び各分野における取組の視点から評価するとともに、社会の変化が加速化する中で、けいはんな学研都市の未来を俯瞰したさらなる取組の展開方向等について、審議、決定する役割を担う。

また、こうした一連のプロセスを関係者が協働で行うことにより、本都市に相応しい進捗管理(PDCA)を進め、新たな都市創造の推進につなげる。

(2) 3つの分野における連携・協働による新たな仕組みの構築

新たな都市創造の実現に向け各主体が連携、協働し、取組を推進することができるよう、「文化・学術研究の振興」、「イノベーション推進」、「都市形成」の各分野で、新たな仕組みを構築する。

当面、次の3つの仕組みを新たに構築し取組を推進するものとするが、将来、必要に応じ機能の充実や新たな機能を付加することができるような柔軟な体制とする。

ア 文化・学術研究の振興に係る仕組み

けいはんな学研都市が今後とも世界の文化・学術研究や我が国の経済の発達に資するためには、世界の動きが加速化するなかで変化の本質を見定め、「知のフロンティア」や「世界の未来像」についての多面的な研究を進めるとともに、けいはんな学研都市が目指すべき方向や学研都市の特徴を活かした政策等について提言していく仕組みが必要である。

そのため、学識者や主要な関係機関による新たな体制の検討を進める。

イ イノベーション推進に係る仕組み

けいはんな学研都市において、イノベーション推進を支援する機関間の情報共有や意見交換を行う場を設置し、事業の相互補完や共同化等も図りながら、それぞれの課題解決にもつなげるWIN-WIN の関係を構築し、けいはんな学研都市発のイノベーションを推進・加速していく。そのための連携体制を創設する。

ウ 都市形成に係る仕組み

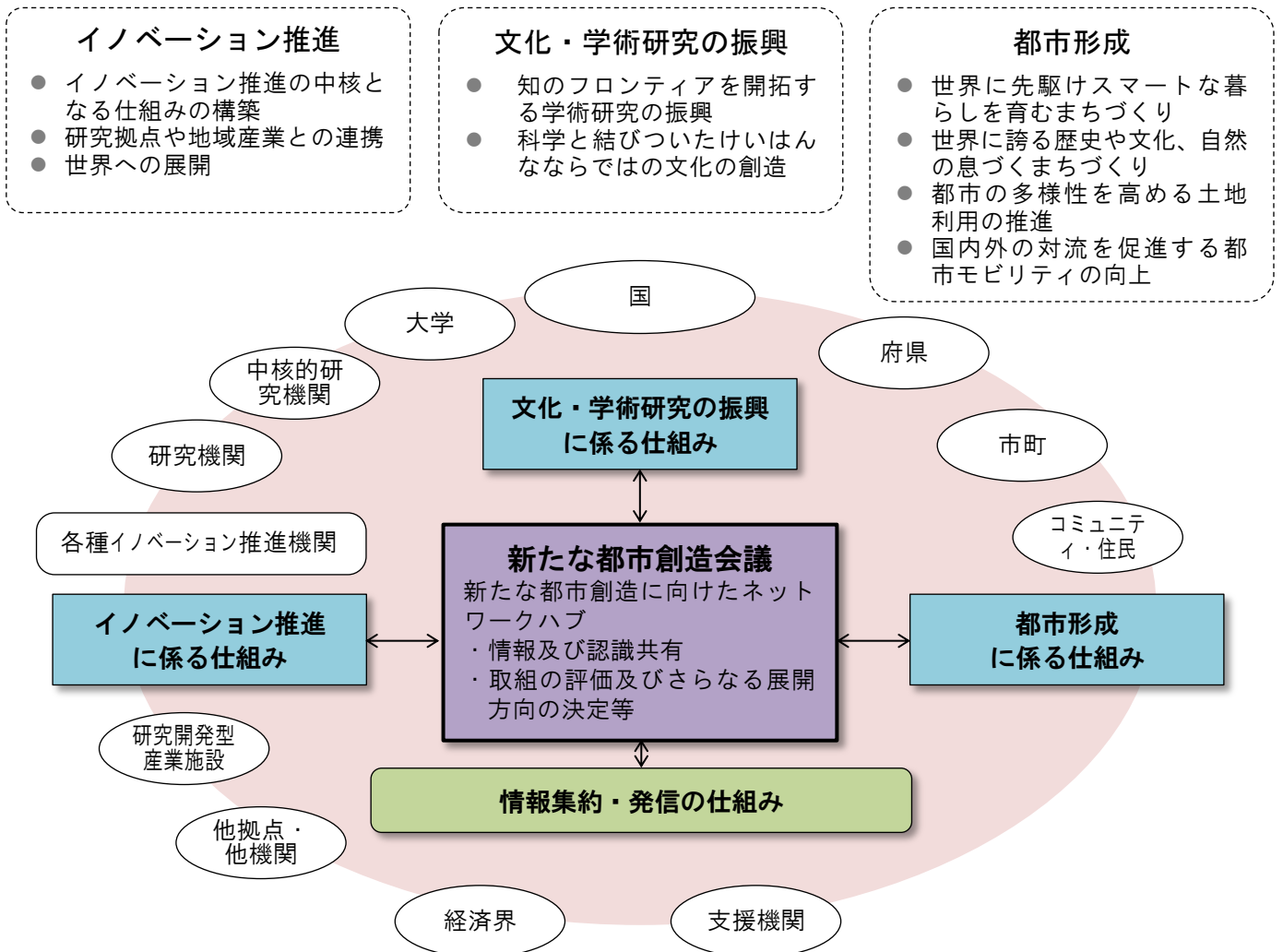
都市形成を推進する上で、3府県8市町の行政界に跨る約15,000haもの広大な学研都市区域において、都市全体としてバランスが取れ、相乗効果を発揮できるようにするため、3府県、8市町の情報共有や連携は極めて重要となる。そのため、3府県、8市町、支援機関等により、都市形成に関するそれぞれの取組の情報共有や協議調整を行うための体制を創設する。

(3) 都市運営の基盤となる情報の集約・発信の仕組みの構築

けいはんな学研都市のさらなる発展に向け、また、様々な分野・機関等での多様な取組が互いに相乗効果を及ぼしながら進展するよう、本都市の人口及び施設立地等の現状や動向、本都市が踏まえるべき社会の動向や時代潮流に加え、文化・学術研究、イノベーション、都市形成における取組の成果や到達点など、本都市が全体としてどのような特徴や強みを有しているのかを示す情報の的確な集約及び発信を行う必要がある。

このため、立地機関や関係機関が連携して効果的な情報の集約及び発信を推進していくための仕組みの構築や、研究開発等の成果を分かりやすく紹介できる場を設ける等、けいはんな学研都市について国内外の方々に一層理解を深めていただくことを通じて都市のさらなる発展を図る。

■都市運営に係る体制の概念図



参考資料

1 けいはんな学研都市新たな都市創造委員会 総会委員名簿

平成 28 年 3 月 18 日現在

	役 職 名	氏 名
<委員長.>	国立大学法人 京都大学総長	山極 壽一
<副委員長>	公益財団法人 関西文化学術研究都市推進機構 理事長	柏原 康夫
<顧問>	公益財団法人 先端医療振興財団 名誉理事長 (京都大学名誉教授) 公益財団法人 国際高等研究所長 (京都大学名誉教授) 公益財団法人 国際高等研究所 副所長 (京都大学名誉教授) 一般財団法人 アジア太平洋研究所 所長 (大阪大学名誉教授) 公益財団法人 地球環境戦略研究機関 関西研究センター所長 (大阪大学名誉教授)	井村 裕夫 長尾 真 松本 紘 宮原 秀夫 鈴木 胖
<委員> 学識経験者	学校法人立命館 立命館大学総合科学技術研究機構 上席研究員 京都府公立大学法人 京都府立大学 名誉教授 (京都府特別参与) 学校法人同志社 同志社大学 教授	村橋 正武 竹葉 剛 渡辺 好章
<委員> 国	国土交通省 大臣官房審議官 内閣府 政策統括官 (科学技術・イノベーション担当) 付 政策企画調査官 総務省 情報通信国際戦略局 技術政策課長 文部科学省 大臣官房政策課長 経済産業省 経済産業政策局 地域経済産業グループ 立地環境整備課長 総務省 近畿総合通信局長 経済産業省 近畿経済産業局長 国土交通省 近畿運輸局長 国土交通省 近畿地方整備局長	石塚 孝 (田村 計) 守屋 直文 野崎 雅稔 柳 孝 (板倉 周一郎) 鎌田 篤 上原 仁 (奥 英之) 関 総一郎 天谷 直昭 (土屋 知省) 山田 邦博 (森 昌文)
<委員> 立地機関	株式会社国際電気通信基礎技術研究所 代表取締役社長 公益財団法人 国際高等研究所 理事長 公益財団法人 地球環境産業技術研究機構 理事・研究所長 国立研究開発法人 日本原子力研究開発機構 関西光科学研究所長 国立研究開発法人 情報通信研究機構 ユニバーサルコミュニケーション研究所長 国立国会図書館関西館館長 国立大学法人 奈良先端科学技術大学院大学長 学校法人同志社 同志社大学長 学校法人同志社 同志社女子大学長 学校法人 大阪電気通信大学長 学校法人 関西外国語大学長 学校法人大阪国際学園 大阪国際大学長 国立大学法人 奈良女子大学長 国立大学法人 京都大学大学院 農学研究科長・農学部長	平田 康夫 立石 義雄 山地 憲治 内海 涉 木俵 豊 片山 信子 小笠原 直毅 村田 晃嗣 加賀 裕郎 橘 邦英 谷本 義高 宮本 郁夫 今岡 春樹 宮川 恒

役 職 名		氏 名
	国立大学法人 大阪大学 理事・副学長 京都府公立大学法人 京都府立大学長 独立行政法人 国立文化財機構理事 奈良文化財研究所長 けいはんな記念公園管理事務所長 日本電信電話株式会社 NTTコミュニケーション科学基礎研究所長 パナソニック株式会社 先端研究本部 材料研究室長 大和ハウス工業株式会社 執行役員 総合技術研究所長 オムロン株式会社 執行役員 常務 CTO 兼 技術・知財本部長 京セラ株式会社 中央研究所長 株式会社島津製作所 執行役員 基盤技術研究所長 サントリーホールディングス株式会社 執行役員 生産研究企画部長	吉川 秀樹 (馬場 章夫) 築山 崇 松村 恵司 山口 隆史 前田 英作 藤井 映志 有吉 善則 宮田 喜一郎 神山 一司 北岡 光夫 上田 光能
<委員> 経済団体	公益社団法人 関西経済連合会 専務理事 京都商工会議所 専務理事 大阪商工会議所 専務理事 奈良商工会議所 専務理事	松村 孝夫 奥原 恒興 宮城 勉 峯川 郁朗
<委員> 府県市町	京都府 副知事 大阪府 副知事 奈良県 副知事 京田辺市長 木津川市長 精華町長 枚方市長 四條畷市長 交野市長 奈良市長 生駒市長	山内 修一 新井 純 (植田 浩) 松谷 幸和 石井 明三 河井 規子 木村 要 伏見 隆 (竹内 脩) 土井 一憲 黒田 実 仲川 げん 小紫 雅史
<委員>	独立行政法人 都市再生機構理事・西日本支社長	西村 志郎
<委員> 中核機関	株式会社けいはんな 代表取締役社長	木村 治久
<委員> 連携機関	ならやま研究パーク協議会長 関西文化学術研究都市 高山地区 立地施設等連絡協議会長 津田サイエンスヒルズ まちづくり協議会長 けいはんな学研都市 精華地区 まちづくり協議会長 関西文化学術研究都市 精華・西木津地区 研究機関協議会長 木津川市立地企業等懇談会 幹事	古海 賢二 中村 茂一 佐々木 啓益 井上 茂 阪田 正和 江見 和明

※ () は前任 (敬称略、順不同)

2 けいはんな学研都市新たな都市創造委員会 幹事会名簿

役 職 名	氏 名
国土交通省 都市局 都市政策課長	井崎 信也 (横山 征成)
公益社団法人関西経済連合会 理事	阿部 孝次
京都府 文化学術研究都市推進監	内藤 義弘
大阪府 企画政策部長	山口 信彦 (新井 純)
奈良県 地域振興部長	一松 旬
公益財団法人国際高等研究所 専務理事	岡橋 誠
株式会社けいはんな 代表取締役社長	木村 治久
公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構 常務理事	瀬渡 比呂志

※ () は前任 (敬称略、順不同)

3 策定経過

総会	幹事会
第1回総会（平成27年7月29日） 場所 ウェスティン都ホテル 議事 ①設置要綱、委員会の進め方及び議事の公開 ②過去30年間の成果と新たな都市創造に向けた取組	第1回幹事会（8月20日） 第2回幹事会（10月2日） 第3回幹事会（11月5日）
第2回総会（平成27年11月26日） 場所 ウェスティン都ホテル 議事 ①（仮称）けいはんな学研都市新たな都市創造に向けて 中間とりまとめ（素案）について ②その他	第4回幹事会（12月18日） 第5回幹事会（1月25日） 第6回幹事会（3月1日）
第3回総会（平成28年3月18日） 場所 けいはんなオープンイノベーションセンター（KICK） 議事 ①けいはんな学研都市新たな都市創造プランについて ②今後の推進体制について	